

恐竜探索殺人事件

恐竜探索殺人事件

オーストラリア編 下

著者 香月翔一郎



主な登場人物

小野原勉

主人公：日比谷署を退職。

香山影治

古生物学者：オーストラリアで恐竜探索。

早川浩一

早川建設社長。

熊谷初恵

早川浩一の2号：勝気

熊谷征次

早川浩一の息子：大学を親父の金で卒業。弁護士になる。

大船碇禎治

大船碇組組長：

亀井靖之

大船碓禎治の息子：大学受験に失敗し、ゴールドコーストへ流れ、在学中に不動産で儲ける。熊谷征次と出会い。

ジェイソン課長 **ダルビー警察署の殺人課刑事**

朝氣

「社長、おめでとうございます。いよいよですか。征次君も弁護士。日本に居た時の征次君からは考えられない事ですが、外国へ出した御陰で本当に変わったのですね。いや、これは少し言い過ぎました。申し訳ございません。」

ある日、社長室へ来た早川浩一に金沢が言った。

「ははは、まあな。まあ、君が言うとおりでよ。俺もまさかあいつがそんな風になるとは考えてもみなかったよ。でもなこれは秘密だが、君が言うよ

うにあいつの頭では卒業なんか考えも付かなかったし、入学さえもおぼつかなかったものだった。まあ運が良いというか、大学自体が経営難の時期だったから、寄付金はずむだけでそれぞれの時期をうまく乗り切ったのが実状で、今でもあいつが弁護士として仕事が出来るとは誰も考えてはいないさ。」

誰もいないその部屋であるが、一段と声をひそめて金沢に言った。

「それでも弁護士ですから、勝てば官軍ですよ。」

「そうだな。しかし、免許や資格を握っただけでは意味が無いから。いっそのこと本当に勉強して卒業した同期の人間で日本人がいたら、それを雇って弁護士事務所を出させてやろうと考えているんだ。」

金沢の言葉に早川が応えた。

「そうですか、それは良いことですな。そうすれば堂々と弁護士様で通りますね。」

「うん、それで君に色々土地の事で動いて貰った訳だが、あと10億円程を作りたいたんだ。どうかなあの吉田専務に言っ、早川建設が持っている土地社屋その他を担保にして銀行から借りだしてもらえんだろうか。個人的な事だから俺から言っても良いけれど、君から言っ、貰えたら助かるが。」

早川が身体を乗り出して言っ。

「そんなことはお安い事だと思えますよ。でも僕は社長のところの借金や

抵当権などの事を知りませんから、一応僕からこんな話があると彼に伝えますから、社長の方で詳しく話してやって下さい。あと1時間程で帰ってくる予定になっておりますから、帰社次第こちらへ来るように言っておきます。」
金沢が言った。

「そうだな。じゃあそうしよう。ま、君も忙しいだろうから仕事をしてくれたまえ。僕もそれまでに抵当関係を少しまとめておこう。」

「はい、判りました。ところで僕は今から新幹線に乗り、京都の物件を見に行きます。だから途中で吉田専務の携帯電話に今の内容を話しておきます。では、失礼致します。」

「おう、そうか頼むよ。」

社長室から出ていく金沢に早川浩一が言った。

「さて、今の状況では早川建設はおぼつかないな、ここからの発注だけではいつかは・・・情けない事だ。この会社だとしていつまでも投資家を集められる筈もなし、・・・いつか金沢が不明金があると言っていた事など考えると、長くは続かないだろう。」

金沢が部屋を出てから早川は応接イスに深々と身体を埋め、冷めた日本茶に手を伸ばし一口すすりながらつぶやいた。

事実、早川建設は談合の発覚から公共工事の指名を外され、完全に民間工

事だけを受注する建設業者に成り下がっていた。しかも早川が社長を引き受けたこのエムバックインベストメント株式会社と言うマンション投資会社だけが早川建設を生き延びさせる糧を稼ぎ出す元なのだ。

「いっそ、征次を全面的に助けて俺もオーストラリアへと逃げるか。」

早川はふと心に浮かんだ事を言葉に出した。

社長室の扉がノックも無しに突然開き、吉田専務が大きな身体を覗かせ、

「あっ、社長。こちらでしたか。」

と言いながら入ってきた。

早川は今のつばやきを聞かれたかと驚いたが手を挙げて自分の前に座る

様に示し、

「忙しいのに又々呼び出してすまん。」

と言った。

「いやいや、社長の事ですから、どんなことでもお役に立たせて頂きますよ。金沢君から聞いてはいますが、具体的にお聞かせ下さい。確か10億円でしたね。」

吉田は大きな身体をひねる様にしてイスに座りながら言った。

「10億円は大きな金だから、半分でも良いかとは考えているんだ。まあ、自社の持つ土地建物を評価して第一抵当やその他を差し引いたら10億と

言う数字になったと言うだけだからね。さしあたって必要では無い金だが、オーストラリアの息子に弁護士事務所を開設させてやろうと考えているところだ。金は有れば有るほど良いと考えただけだからね。」

早川が言ったところへ秘書がコーヒーを二つ持って入ってきた。

「おっ、恵子ちゃん。いつ見ても美人だねえ。丁度コーヒーを飲みたいな
と思っていたところだよ。」

テーブルにコーヒーを並べている秘書に吉田が声をかけた。

「まあ、専務さんはいつもお口がお上手だから。」

秘書は言って部屋を出ていった。

「あのこはいい子ですね。話しに入ってきて来ないし、秘書としては最高ですな。僕もあんな秘書がいたら会社が楽しくて、外へ出る事が少なくなるでしょうな。」

吉田が早川に笑顔を見せて言った。

「そうだね、でも実際わたしの仕事なんてこの会社では無いのと同じだから、可哀想な気もするがね。」

「いやいや、これから社長にも頑張ってもらわなくちゃなりませんよ。会社の拡大策は色々と着々と進んでおりますからな。所で話を戻しましょう。資金の目的は会社では無く、息子さんの弁護士事務所開設資金として考えれば

よろしいのでしょうか。そうなれば金額のところでも少々問題が出てくると思いますし、海外送金の問題も有りますから、いっそ社長の別荘用地取得と建設と言う事にされた方が銀行としても稟議書が書きやすいと思うのです。それともいっそのこと弁護士事務所ビルディング建設としましょうか。」

早川が少し弱気になっての言葉に、吉田が発破をかける様に言葉を発した。

「それは、君に任せるよ。実際の所は息子の事業援助と言う事だから。しかしこれは君の内に秘めてもらっててもいいから。知っていてくれたまえ。」

「はい、それは良く判っております。それでしたら早速手続きを始めますので、総ての対象物件に関しての権利関係に関する書類のコピーを揃えて戴

けますか。それがわたしの手元に届き次第銀行と交渉してみます。別に金利に関しての希望などはございませんね。」

吉田が念を押した。

「ああそれも総て君に任せるよ。」

「そうですか。それでは書類が揃い次第わたしの方へお届け下さい。」

吉田は言って立ち上がった。

「そうそう、一度、ゆっくりと息子さんにお会いにオーストラリアへ旅行されるのはいかがです。長いことお会いにならてはいないのでしよう。大きなスポンサーであるお父さんが見に来られると息子さんも発憤されるので

はないでしょうか。」

吉田がドアへと歩きながら振り返って早川に言った。

「そうだな。考えておくよ。」

早川が答えたと同時に社長室のドアが閉まり、吉田はその影に消えた。

「そうだな、吉田君もたまには良いことを言ってくれる。この話が済んだら一度征次に会いに行くでしょうか。」

吉田の出でいったドアを見つめて早川がつぶやいた。

「そろそろ何とか連絡があっても良い頃だと思っんですがねえ。佐々山さんの方にも連絡はありませんか。」

ある日ゴールドコーストでゴルフに同行した香山が佐々山に聞いた。

「もう6ヶ月でしょう。小野原さんも意思の強い人ですねえ。たぶん香山さんの英語浸けと言う言葉を守りとおしているのでしょうか。そろそろ日本語が恋しくなっていると思うのですが、まあわたしには真似が出来ませんね。」

「本当にねえ。どこかで化石でも見つけたら連絡ぐらいあると思っただけですが、これだけ無しのつぶてとなると心配になってきますよ。あっ、あ

そのラフに佐々山さんの球がありますよ。」

香山が佐々山の打球を探しながら言った。

「参ったなあ。あんな深いラフで。仕方がない7番ぐらいでフェアウエイに出しますか。」

佐々山が7番アイアンを抜き出し、1度素振りをして打った。

「おっ、素晴らしい。さすが佐々山さん。これ2打目ですよ。参ったなあわたしの3打目よりか前ですよ。えーっと右ドッグレッグか、もう一度刻んでおくか。」

香山がつぶやきながら9番アイアンを取り出そうとした。

「何言ってるんです。もうグリーンは目の前ですよ。香山さんなら7番で充分届きますよ。」

佐々山が言うので香山もそうかなと思いつ番アイアンを手にした。

「よし、佐々山さんの意見を入れてチャレンジしますかな。でもわたしはスライス名人ですから恐いなあ。」

言いながら打った香山の打球は素直にグリーンへと吸い込まれた。

「いいじゃないですか。プロ並みの打球ですよ。まあ2打目だったらすけれどね。」

「あつ、ひどい言い方だなあ。じゃ佐々山さんの打球も見せて貰いませよ

うかな。」

「まあわたしも3打目ですから大きな事は言えませんがね。」

と言って佐々山が打った。球はグリーンのパールに吸い込まれていった。

「おっ、さすが佐々山さん。もうプロですね。2打目だったら。」

「ははは、きつと思うと思った。ははは。」

佐々山が大笑いしながらグリーンの方へカートを引きながら歩き始めたので香山も続いた。

「小野原さんはどのあたりを徘徊しているのでしょうかね。」

ホールに球を収めて佐々山が言った。

「もう6ヶ月だから幾らゆっくりでも一周は終わってる筈なんですが、まあひよっこりたたいまって帰ってくるんじゃないですか。」

香山もホールから球を取り出して言った。

早川浩一逃避計画

「お前、真面目に仕事をやっているのか。もう昼じゃないか。今からブリスベンの事務所へ行っても働く時間なんか無いじゃないか。」

浩一が寝ぼけ眼で二階の寝室から降りてきたパジャマ姿の征次に向かつて言った。

「なんだよう。仕事はちゃんとやってるぜ。今日はたまたま午前中の客が無いし、社員が全員いるから俺はいいんだ。まあ飯を食ったら出掛けるから心配しなさんな。」

征次が台所のドアを開けながら振り返って言った。

浩一は全くどうしようも無い奴だどつぶやきながら立ち上がって、開け放たれた窓をとおして広いカナルを横切って走るクルーザーの雄姿を眺めた。

「俺も、もう歳だし、息子がこれだから、今の内に誰かに会社をバトンタッチしてから引退し、こっちへと来て、あんなクルーザーを買って太平洋のど真ん中で釣りでもしながら暮らすってのも悪くはないな。」

早川浩一が考えている後ろから

「親父、お袋はどこへ行ったんだよお。」

と征次が声をかけた。

「ガキじゃあるまいし、いつまでもお袋お袋と言うんじゃねえ。美容院へでも行ったんだろう。」

「ちえ、仕方ないなあ、飯抜きで仕事に行くか。」

浩一の言葉で征次は寢室へと引き返した。

「何だよ。あの馬鹿親父。来たら来たで、文句ばかり言いやがって。奴は俺達に金だけ渡していりゃいいんだ。今でも数十億も振り込んできているくせに全部自分の口座に入れちまって。くそつたれだ。」

征次はつぶやきながら背広を着て、ベンツ500のキーを握った。

征次の運転するベンツ500は、彼の事務所が有るプリズベン方向の北向きとは正反対の南向きに走り続けている。

「馬鹿親父め。会うと毎回小言しか言う口を持って無いのかよ。このベンツを見たときでも、何だこんな奇妙な色の車を買って、バカヤロウだもんな。」

どこが悪いんだよアンバーカラーでいい色じゃねえか。」

つぶやきながらカジノの駐車場へと車を滑り込ませた。

「あら、いらっしやい。どうしたの昨日は来なかったじゃないの。」

カジノの入り口に特別に設けられたエレベーターに会員用のカードを挿入して乗り込み、7階のVIPルームへと入った征次に、日本人担当の女性マネージャーが目敏く征次を見つけて言った。

「うちの馬鹿親父が来てるんだ。ここに通っている事がばれたら又、何を言われるかも知れないからね。たまにはお休みしないなあ。」

「へえ、大変なのね。さつきから陳さんが貴方を捜していたわよ。バーに

行ってご覧なさい。でもあの人と余り付き合わない方がいいわよ。」

女性マネージャーが征次の耳元でささやいて離れていった。ほのかに香る芳醇な香りに征次はつかの間酔いしれて、彼女の後ろ姿を眺めていた。

「おう、征次。今日は遊ばないのか。昨日は来なかったじゃないか。」

バーへと入った征次を見つけて、早速、陳が立ち上がり近づいて言った。

陳は香港から20年も前から移住してきている。顔立ちは典型的な中国人顔をしているが征次とこうやって話していると周囲の人間からはよく、兄弟かと聞かれる。その都度陳のいないところで俺は日本人だと憤って説明する。

陳は容貌からみてもたいして大金持ちには見えないのだが、カジノに来る客

に対してその資金を貸し付けている。カジノでは御法度の事だが、今のところ問題も無いので公認されたように振る舞っている。実際このフロアーで居る限り食事も飲み物も総て無料であるから、見た感じではゲームにみずから掛け金を賭ける事もしない陳は、浮浪者のたかりの様にも見られる。聞くと数億円の金を客に貸し付けているらしい。先月、征次も負けが込んだ時に1万ドルを用立てて貰ったことがある。100万円程だが、その時はその金で倍程度の金を稼ぐ事が出来たから。外へ出て陳に日本食レストランで奢ってやった。

「今日は親父が来ているので遊ぶ金が無いんだ。だから飯だけ食いに来

た。」

征次もこの程度の英語は話せる様になっている。

「それは可哀想な事だなあ。そんな飯だけに来るなんて寂しいじゃ無いか。少し貸してやるから遊んでいけよ。」

陳がそう言って100ドル札の束を征次の手に握らせた。

「そうだな。じゃあ、ちよっとやって行くか。」

誘惑に弱い征次がいつものバカラテーブルに座った。

「どうですか、出目は？」

隣に座っている日本人の出目メモを覗き込んで征次が聞いた。

「いやあ、駄目です。さつきからわたしの張る反対ばかり来るんです。今日についてはません。」

あつ、熊谷先生じゃないですか。お久しぶりです。ここへは良く来られるのですか。」

征次の顔を見たその客が言った。しかし征次には見覚えの無い顔だった。

「ええまあ、たまには生き抜きも必要ですからね。」

征次は言いながら、彼のメモを見て、バンカーサイドに1000ドルを張った。それを見て

「今回は絶対にプレイヤーサイドですよ」

と、その日本人が言って同じく1000ドルチップをプレイヤーサイドのボックスへと置いた。

ディーラーが手さばきも見事にカードを配り、バンカーサイドで一番大きな額を張っている征次の前にカードを配った。いつものように征次は配られたカードを覗き込むようにして端を少しだけ持ち上げ一枚をめくった。ハートのキングだった。

「よし、」

と声を出し、残る一枚のカードも同様にして見た。

「よーし」

再度声を出しそのカードを表に返して強くテーブルに打ち付けるように置いた。

プレイヤーサイドはテーブルの向かい側で座っている中国系と思われる2万5000ドルのチップを賭けている人物が受け取り開いた。そのカードが示した数字は合計で18だった。

「よし」

征次は大きな声で叫んで、ディーラーが積んだ1000ドルチップを手元に戻した。

「やっぱり、わたしの感は駄目ですなあ。今日はこれまでにしますかな。」

と言って隣の日本人が席を立ったが、征次は返事も返さなかった。

続いてのカードは征次の前を通り過ぎ、2つの席を挟んだ中近東系の人間へと配られた。征次がそのカードに注目していると、彼は無造作に2枚のカードをめくり「ちえ」と言葉を出した。カードの合計数字は17だ。プレイヤー側は18を引いた。征次の負けは1000ドルだ。ここで引き上げれば陳さんに利息だけを払えば良いのだが、ゼロで帰るのも癪だし、家に帰ってもうるさい親父が居るだけだからと、次のゲームに2000ドルのチップを積んだ。

「陳さん、最初の方はうまく勝ってたんだけど、最後の読みで目が変わっ

てしまったんだ。あと2万ドルだけ貸してくれないか。」

征次がバーで飲んでいた陳の側に寄ってきて耳元でささやいた。

「いいよ。ノープロブレム。征次さんならもっと貸しても良いですよ。じやあちよつとこっちへ来てください。」

と言って先に立って歩き始めたので征次も続いてトイレへと入った。

「じゃあ、これ。4万ドルあります。さっきの1万ドルも合わせて合計5万ドルの1日分の金利だけは引いてありますからね。」

と言って陳が封筒に入った現金を征次に手渡した。

「へえ、随分と用意のいいことだね。」

と中身も見ないで背広の内ポケットへと征次はしまい込んだ。

テーブルに戻った征次は、負けを取り戻そうとの意気込みで1回のゲームに5000ドルずつ賭ける事にした。

翌日、家を出るときには親父にプリスペンの事務所へ行くと言って出たが、10時に征次はカジノへと出勤した。毎日の日課としてここへと来るものだから、自分でもどちらが職場かも判らなくなるほど錯覚を覚える。しかし、親父への手前、現金を掴んでの出かけには、事務所へ出掛けると言う言い訳は通用しない。だから今日も手持ち金はゼロでVIPルームに入った。バーを見ると陳さんが早くからワイングラスを傾けていた。

「朝早くから飲んでるんですね。」

征次がうしろから声をかけた。

「ああ、ビックリした。なんだ征次さんか。どうしたんです。今日は早いじゃないですか。」

陳が振り返って愛想のいい笑いで言った。

「親父がまだ日本に帰らないので夜は出て来られないからなあ。不便な生活だよ。所で今日も少し貸してくれないか。親父は一週間もしたら帰る筈だから、そうしたらすぐに返すよ。」

「まあそんな事でしたら、気にする事じゃ無いですよ。前にも言いました

が征次さんなら幾らでも貸して良いとボスからも言われていますからね。じや、連れシヨンにいきましょうか。」

陳は相変わらずの笑顔で言っけてトイレへと向かった。

「少しずつじゃ気持ちも小さくなって、大きな勝負が出来ないでしょうか。今日はこれだけ持っていてください。」

と言っけて大きなずしりと重い封筒を征次に手渡した。

「幾ら入っているんだい。」

重さを確認した征次が言っけた。

「たった20万ドルですよ。勿論、昨日の5万ドル分の金利も引いてあり

ますから、気にしないで賭けてください。もし必要なら1億円分ぐらいは1時間も時間をくれたら用意をしますよ。聞くところに寄れば征次さんはもう1億円ぐらいこのカジノにつき込んでいるんでしょう。いっそのこと大きく賭けて取り戻しちゃいなさいよ。簡単でしょう。1億円を1回のゲームに賭けて勝てばすぐ元の損は取り返せるんだから。1万ドルや2万ドルをちまちま賭けていても1億円を取り戻すには大変な時間が必要ですからね。まあ、頑張ってくださいや。」

そこまで言って陳は出ていった。征次は陳の言った言葉を反復しながら小部屋に入り、便器に腰を降ろした。

「それもそうだ。あいつの言う事はしごく尤もな事だ。1億円稼ぐには1億円賭けて一発勝負をすれば瞬間で今までの損を全部取り返せるじゃないか。なんで今までそれに気づかなかったんだろう。よし、やってくるか。」と、つぶやいて征次はトイレを出た。

昼を少し過ぎた頃、陳を見つけた征次が言った。

「やっぱり陳さんが言った様な賭け方をしないと負けた分は取り返せませんね。出来たら明日、1億円分を用意してくれませんか。」

「そうでしょう。征次さんみたいにあんな賭け方をしているのは絶対に1億円もの損は取り戻せませんよ。判りました。明日の昼過ぎ、丁度この時間に

来てください。それまでにカジノの征次さんの口座に1億円を入れておきますから。」

征次は腕時計を見て時間を確認してうなずいた。

「じゃ、明日は征次さんの一世一代の博打を見せてください。待っていますよ。」

陳の言葉を背に征次はVIPルームを後にした。

翌日2時頃まで時間をつぶした征次がVIPルームに顔を見せると、陳がいつもの笑顔で近づいて来た。

「言われた様にちゃんと1億円分のお金をドルで征次さんの口座に振り込んでいますから、あそこの窓口でバウチャーを発行して貰って来てくださ
い。」

と言った。バウチャーとはカジノで使える金券のようなものだ。征次は言
われたように1ミリオンドルのバウチャーを発行して貰った。

テーブルに座るといつになく人が多い。ディーラーも今まで見たことの無
い中年の男だ。ハゲ上がった頭に一目見ただけで判るカツラを乗せていかに
も年齢でサバを読んでいると言った感じの男だった。征次が座ると同時に新
しいカードを総て扇状に並べ、ゲームに参加している客へと確認させたのち、

総てをバラバラにかき混ぜ、一纏めにして大きく二つに割り、その一つを何度もシャッフルした。続いて残る一山のカードも同じようにシャッフルし、二つの山をまとめてカードホルダーへと収めた。

ディーラーが手には何も細工をしていませんよとでも言うように両手を広げ、手のひらを客全員へと見せ、ポンと手を打って、カードホルダーから数枚のカードを引き抜いた。引き抜いたカードは全員に見せられてテーブルの穴から捨てられた。いよいよゲームの開始だ。

征次はディーラーの前に1ミリオンドルのバウチャーを投げ出した。それを受け取ったディーラーはテーブルの上の所定の位置に横向きで置き、その

横に25万ドルチップを4個置いて、フロアーマネージャーの確認を待った。寸秒も置かずマネージャーが来て、視認し「オッケイ」と言い、征次にウィンクをして消えた。

征次は受け取った4個のチップを一度に賭ける度胸がまだ無い。4ゲームほどを他のプレイヤーが楽しむのをタバコを吹かしながら見ていた。今までのゲーム進行過程では自分の予想を総て満たしていた。いわゆる今までの4ゲームをバンカーサイドに賭けていれば4億円を稼いでいた勘定だ。でも次に来るのはどちらかが判らない。征次は25万ドルチップをディーラーの手に放り投げた。それを受け取ってディーラーは1万ドルチップに替えて、

そのチップの山を親指と小指を立てたげんこつで征次に押し返してきた。

征次はその中から10枚のチップをバンカーサイドのボックスへと積んだ。いわゆる1000万円を次のゲームに賭けたのだ。征次の手元に2枚のカードが配られた。いつものようにカードの上を軽く叩き、下の一枚を抜き出しカードの端を折り曲げるようにして見た。絵札だ。続いて残る1枚のカードも同じようにして見た。征次は二枚のカードを重ね裏返したままディーラーへとテーブル上を走らせる様にカードを投げた。受けたディーラーが表に返し、プレイヤーサイドのカードと並べ、バンカーサイドの勝ちを告げた。

「よし、幸先はいいぞ。」

征次はつぶやいて、勝ち金として掛け金の横にディーラーから積まれた10万ドルを前回に賭けた掛け金の上に重ねた。いわゆる次のゲームは同じバンカーサイドに20万ドルを賭けると言う意思表示だ。いよいよ考えていた1億円には及ばないが2000万円の博打だ。

ディーラーが「よろしいですね」と、掛け声をかけてカードを配り始めた。今回のカードはバンカーサイドが強よしと考えた数人の客の内、征次より多くの金額を賭けた客へと配られた。

「よし、やった。」

その客が表に現したカードを見て征次が大きく叫んだ。征次の前には更に

20万ドルが勝ち金として積まれた。征次の声や勝った客の大声に周辺にいた人々が徐々にその位置を替え、征次の後ろ側に集まってきた。勿論勝っている客を応援するためだ。征次はその勝ったチップを更に上に積み上げた。一つのタワーが建ったみたいだ。観客のざわめきにふと気がついた征次が振り返って見回すと数十人の観客が征次の掛け金に驚いて声援を送ってきていた。ふと征次は閃いた。

「待てよ、今までで何回バンカーサイドが来ている？1、2、3、・・・6回か。よし。」

征次は手を伸ばして総てのチップを手元にと引き寄せた。数えてみると1、

3ミリオンドルになっている。少しはディーラーにチップとして引き算されているから1億2500万円ぐらいであろうか。よし今度は絶対にプレイヤーサイドに来る。征次は確信した。よし一世一代の博打だ。征次は持っている総てのチップをプレイヤーサイドのボックスへと押しやった。後ろでは「うわー」と言うざわめきが流れた。征次は注目されている自分を背中で感じていた。ディーラーが又々フロアーマネージャーを呼んで掛け金を確認させた。そのフロアーマネージャーは軽く「オッケイ」と言って、テーブルの横に立った。

カードが配られた。プレイヤーサイドに賭けている客は征次だけで他は総

てバンカーサイドに掛け金が積み上げられている。

「ふふふ、見てろよ。みんなから巻き上げてやる。」

つぶやいて征次はいつもの様にカードの上を軽く叩いた。下側のカードを見た。折り曲げるのが少なくてカードの隅に有るはずの数字が見えない。もう一度折り曲げ幅を広げて見た。何とハートの2だ。最低のカードを引いてしまった。でもまあ次のカードで7を引けば合計9になる。次のカードは更に慎重に折り曲げて見た。そんな馬鹿な。絵札だ。

「ちくしょう」

言葉と共にディーラーの手元にカードを投げつけた。バンカーサイドの力

ードは合計で17のステイ。よし、あと1枚。ディーラーから配られた。

「7以上になればいいんだ。5でも6でも、7なら最高だ。プレイヤーサイドのあとから配られたカードは7だったから、必ず小さなカードが続いて居る筈だ。よし来い。」

ディーラーの前に並べられているカードを見て、征次はつぶやきながら手元に配られた1枚のカードに手を伸ばした。

「よし、来たぞ」

征次がカードの隅を持ち上げて、数字が見えない事で、思った通り小さな数字が来た事を知って言葉を吐いた。

「うわー・・・」

後ろで大きなどよめきが起こった。征次が引いたカードはクローバーの3だった。そのどよめきをかき分ける様にして征次はV―Pルームをあとにした。

翌日、征次は弁護士事務所から陳からの電話を受けた。

「どうしたのです。今日は真面目に仕事ですか。」

「昨日はくやしくて眠れなかったよ。今でも最後のカードが目の前をチララしているよ。どうだい、もう一度復讐戦をやりたいんだが今夜にでも1億円を用意してくれないだろうか。」

征次の答えである。

「そうでしょう。あそこまで勝ち進んでいたのに残念でしたね。でももし最初の2回のゲームにわたしが言った様に賭けて居たら今では2億円の大金持ちでしたよ。」

陳が煽るように言った。

「そうなんだよ。あそこで失敗だった。今夜はじっくり見極めて勝負をしたいんだ。」

「わかりました。早速ボスに連絡を取ります。では。」

と陳は言って電話を切った。しかしその返事は征次が弁護士事務所を出る

まで無かった。

8時きっかりに征次はVIPルームに立った。見回したが陳の姿が見えない。仕方なくバーへと行き、夕食を摂っていなかったので積まれたサンドイッチを両手に掴んで座るべきイスを探した。

ウェイトレスが飲み物の注文を聞きに来たので征次は口にサンドイッチをほおぼりながらビールを注文した。そのビールが届けられたところで陳がエレベーターから出てくるのが見えた。征次は声を出さず、陳に向かって手を振った。

「昨日は残念でしたな。」

陳が真向かいのイスに座って、ウエイトレスにヘネシーを注文してから征次に言った。

「まあね。うまく行くと思ったんだけどなあ。でも今日は陳さんの言うようにやってみるつもりだよ。」

早く金のお話をしろと言うように征次が返事を返した。

「そうそう、その事なんです、今日あれからボスの所へ行ってきましたよ。ボスが言うのにはね、貴方に貸すのは1億円をリミットとわたしに言いたそうなんです。だから今は貴方に2500万円も余分に貸してしまっていると怒られてしまいました。少し返して貰えますか。」

陳が決まり悪そうに言った。

「待てよ。それは無いぜ。まだ親父がゴールドコーストに居るから、金を動かす事は出来ないんだ。それは陳さんにも言ったじゃないか。」

征次が少し慌てて言った。

「ええ、それはよく判っているのです。でもわたしはボスの言う通りにしないと命がなくなりますから。お願いしますよ。」

「そんなこと言われても、今すぐなんて出来ないですよ。」

「まあ。わたしも征次さんの言う事はよくわかるのですが、ちょっと待ってください。電話をしますよ。」

陳が言って電話ボックスへと入った。数分で出てきて言った。

「ボスが言うのですが。明日、プリスペンの事務所の方へ朝10時頃お伺いしますとの事です。必ず居てくださいね。もし居なかったらわたしは貴方がどうなるかは知りませんからね。最初から命までは取りませんが、手や足の一本ぐらいは覚悟していてくださいね。では明日10時に。」

征次の返事を聞こうともせずに陳はエレベーターへと消えてしまった。

「えっ、先生、今日は早いですね。」

弁護士3人が共有して使っている秘書の内田遥香が朝の挨拶も忘れて言

った。

「うん、今日は10時にお客が来るからね。来たらずぐ僕の部屋へ通してくれたまえ。お茶は、うーん、コーヒーでもいいか。コーヒーを頼む。お客が来てから人数分を隣の喫茶店に注文してくれ。それにしてもみんな来るのが遅いね。もう9時半を過ぎているよ。」

征次が返事を返した。

「ええ、今朝は皆さん裁判所の日ですから。」

遥香が答えた。

「あつ、そう。じゃ、頼むね。」

征次は腰を挙げて自室へと入った。

「先生お約束のお客様が参られました。お通ししてもよろしいでしょうか。」

デスクに向かったままうつらうつらしていた征次はハツとして立ち上がった。

「どうぞ」

入ってきたのは陳を先頭にして70歳程の白髪 of 紳士だ。続いてのっそりと部屋に入りドアを閉めてそれにもたれかかる様にして立った大男を征次は見えて震え上がった。

「じゃあかけさせてさせて貰いますよ。」

征次が座れとも言わないので、白髪の紳士がそう言って、征次の机の前にある、総革張り製の豪華な応接イスの一つに腰を降ろした。

「いかがです、貴方のイスですから遠慮なくお座りになったら。」

その言葉で征次はおずおずと腰を真向かいのイスに降ろした。

「まあそんなに堅くならないで、別に貴方を食べに来た訳じゃありませんから。まっ、端的にお話をしましょう。そうですね、この陳からの話では既に1億2500万円を私どもからお使い頂いて居るそうでありがとうございます。ただ、私どもの貴方へ供する金額の上限を1億円としておりました

が、この陳が間違つて多くを貸し付けてしまいました。だから、昨夜はこの陳に少し痛い目をして貰いました。おい、陳の背中を見せてやれ。」

征次に言いながら、首を大男に廻して紳士が言った。大男が陳のうしろに廻り着ていたシャツを無造作に引き上げ、その身体を征次に見せた。一瞬征次の目は陳の背中に釘付けにされたが、気持ちを振り払う様に顔を背けた。

「昨夜、陳さんにも言いましたが、まだ親父がゴールドコーストの家に居るのでお金を動かす事ができ無いのです。数日中に日本へ帰りますからそれ以後でしたらすぐに返済出来るはずですよ。だからもう少し待って欲しいのです。」

征次が震える声を抑えながらその紳士に言った。横から大男が大声の中国語で叫んだ。

「バカヤロウ、何をくだらねえ事を言ってるやがる」

とでも言ったような感じに征次は聞こえて又々震え上がった。その時扉の向こうでガラガラガツチャンと大きな物音がした。ドアを開けて陳がウエイトレスに言った。

「お嬢さん、飲み物は要りませんから外へ出ていてください。」

その声を聞いて征次は又々震え上がった。

「まあね、先生。別に先生をどうこうするなんて事は考えておりませんか

ら、そう堅くならないでお話をしましょう。先生だってこんな大きな弁護士事務所を経営なさっておられるのですからこんな1億円少々のお金なんてはした金じゃ無いんですか。とりあえず、わたしが今日こうやって出てきたのですから、今用意出来るだけの金額は持って帰らせてくださいよ。いかがです。ちょっと事務員さん呼びましょうか。おい。」

征次には優しく話し掛けるのだが、最後に大男に向かって指図する顔は親分顔丸出しだ。遥香が呼ばれて部屋へと入ってきた。

「お呼びでしょうか。」

遥香も部屋の雰囲気を感じて客を見ないで征次に向かって聞いた。

「うん、今現在現金では幾ら銀行にあるのかい。」

征次が聞いた。

「えっ、よろしいのですか。こんな所で言っても。」

遥香が焦って聞いた。

「ああ、お嬢さん。私どもには気兼ねなく、先生に聞かれた事は素直に話してあげてください。」

その紳士が優しく言った。

「はい。昨日確認致しましたが残高は120万円と少々です。」

「何だって、そんな物しか残っていないのか。他の口座はどうなんだ。」

征次が遥香の答えに動揺して聞いた。

「他の口座と言いましても、別会社の方は完全にマイナスになったままで
すし、信用口座には亀川様からの入金が入金が5000万円程あるだけです。」

遥香が答えた。

「何だ、有るじゃないか。それを全部降ろしてきてくれるかい。」

征次がホツとして言った。

「えっ、でもこれは信用口座で私どものお金ではありませんよ。」

遥香が慌てて言った。

「なに内田君言っているんだい。その口座も僕の口座だろうだったら何も

問題が無いじゃないか。出して。出してきてくれ。」

征次はイライラしながら遥香に言った。

「あのお、先生。信用口座ですから、先生のサインだけではお金を出すことは出来ないんです。」

遥香がこんな所で先生に信用口座の解説までしなくてはならないのかと思った所へ、

「先生、信用口座と言うのは先生を信用してお客様が一時期口座を借りているというわけだから先生のお金じゃ無いんですよ。でもその本人のサインが入った委任状が有れば出すことが出来るのですよ。委任状はお持ちです

か？」

その紳士が言葉を繋いでくれた。

「へっ、そうなのか。でも亀川さんのサインを貰った白紙は有ったな。」

征次が遥香に聞いた。

「はい、確か亀川さんが会社を設立なさるときに必要な事が有るかも知れないから余分にと、白紙にサインをしていただいたものが数枚有ると思います。」

遥香が答えた。

「よし判った。それを一枚持ってきなさい。」

遥香はしかしと、言いたそうな顔だったがドアを開けて出ていき数分後に一枚の白紙用紙を持って入ってきた。

「じゃあそれに委任状としてタイプしてくれたまえ。」

征次が言った。

「えっ、あのうわたしには出来ません。」

遥香が違法行為に携わるのはイヤだと拒否をした。

「何を言っているんだ。委任状を書くだけだろう。」

征次が強く言った。

「でも、イヤです。わたしには出来ません。」

「まあまあ、二人ともそんなことは言っていないで、先生直々に書かれるのが筋道じゃあないのですか。」

紳士が遥香に助け船を送ってくれた。

「でも、先生は書けませんもの。」

遥香が紳士に言った。

「えっ、弁護士の方が委任状を書けないのですか。」

とビックリ顔で征次に向かって言った。征次は下を向いたままだ。

「おい陳。お前が草案をペンで別の紙に書け。そのパソコンで打ち込んで貰うのは先生にやって貰う。パソコンぐらいは打てるでしょうね、先生。」

紳士が聞いた。

「はい。少しぐらいは・・・」

征次が、しおれた花がいっそうその莖をしおらせた様につぶやきながら頭を下げた。

「よし決まった。陳、その先生の机を使って書け。そうそうお嬢さんその間に日本茶が有りましたら、この爺さんに一杯入れてくれませんかね。」

紳士は陳に言ったその顔を遥香へと向け替えてやさしく言った。

大陸一周旅行

「いやあ、香山さん1年は難しいですね。あっちうろろう、こっちうろろうして時間をつぶしても車で走る分には時間が過ぎ去るより先に目的地に着いて、時間が余って仕方が無かったですよ。」

8ヶ月を経過してゴールドコーストへと帰ってきた小野原勉が香山に言った。

「そうでしょう、幾ら広大なオーストラリア大陸と雖も、自動車と言う文

明の利器を使えば早ければ1ヶ月で走り抜けられますからね。所で恐竜の発掘はどこかでやってみましたか。」

「はい、走っていると結構何かを掘った跡地みたいなのが見受けられましたので、その都度いちいち車を寄せて穴へと入って行き調べてきましたよ。香山さんに聞かされていたパースの博物館で館長さんにも会えましたし、2週間程毎日通いました。あそこは凄いですね。毎日行って飽きませんでしたからね。それにしても、やっぱりオーストラリアは広いですね。実感しました。香山さんに聞いていた地平線や、三角道路の話は実際のところ想像が出来なかったのですが、現実に行ってみるとやはりビックリしました。ブルー

ムで月の階段なんかも見てきましたよ。あそこは結構日本人が居ますね。月の階段を見ている時に、日本人の若者男女5名がみすばらしい車に乗り合わせに来ていまして、わたしの泊まっているモーテルの庭でバーベキューをして久し振りの日本語を楽しみました。日本で生活していると全く縁の無い事が非常に多くて、数限りないファーストエキスペリエンスを経験させてもらいました。」

その後、延々と小野原勉の体験談が繰り広げられ夜の明ける頃、それぞれこの部屋へ入り眠りに就いた。翌日、2台の車を連ねて香山の山荘へと向かった。

「ゴールドコーストも良いですけど、オーストラリアを一周してきてから見たこのダルビーは身近に親しみを持つ事が出来ます。楽しみだなあ。いよいよ本格的な建設と恐竜探索が楽しめますね。」

山荘に着いて改めて乾杯の時だ。小野原勉がしみじみと言った。

「さあ明日から材木の切り出しに裏の森へ入りますよ。裏の森はワンダーフォレストと名付けましたね。約5万坪程あるのですが、何度入っても方角を間違えるものですからワンダーフォレスト。つまり不思議の森ですな。あとで長いこと使っていないチェンソーのチェックもしておきます。」

いよいよ小野原勉の山荘を香山の山荘のある敷地内に建てる作業に取り

掛かるのだ。小野原勉は子供時代、学校の遠足を待つ前夜のような気持ちでベッドに入った。

大船碓禎治

大船碓禎治は千葉県を基盤にしたやくざで、非構成員も入れると500人を越える組織の長である。元々テキ屋の親分として代々続いてきた。そこへ全国組織の暴力団から参加の手が伸びてきて、大船碓禎治の代になってその

傘下に編入された。今までは自分が一番であったはずだったのが上に何段にもわたった親分衆が出来、それなりの義理を果たさなくてはならない立場へと変わった。その全国組織暴力団の舎弟、中沢組の中沢が大船碓禎治の上に付いた。中沢の女が千葉市内で小さな料亭を開いている。女の名前は川島晴美といった。小股の切れ上がった、顔の小さい、気さくな美人である。年の頃は30を少し越えた頃だろう。大船碓禎治も中沢に気を使って会合などには必ずこの料亭を使っていた。

「姐さん。」

「姐さんはやめて。お願い晴美って呼んで。」

そんなある日、ふとした事から二人の間に関係が出来てしまった。常に関西へと出掛ける中沢では満足出来ない晴美の方から近づいたものだった。

大船碇禎治にも妻とは別に2人の女がいて、それぞれに1人ずつ子供があった。亀井靖子には千葉市内で小料理屋をやらせている。その息子が今、ゴールドコーストへ行き、大学で勉強をしながら不動産に手を伸ばし、随分と金を稼いでいる。勿論その元になる金は大船碇禎治が送り与えたものだ。

「こんな事を続けていると、いつかはばれる。その時は靖之の所へでも逃げるか。」

晴美の腹の上で大船碇禎治は考えていた。

「ねえ、何を考えているのお。もっと、もっと強く。お願い・・・」
晴美が声を絞らせて言った。

「親父、昨日銀行から電話があった。なんの金だよ。2億円なんてビックリしたぜ。送ってくるときは何とか連絡ぐらいくれよな。」

久し振りにオーストラリアの靖之から電話が入った。

「こっちにあった山が少し売れたから、今更使い道も無いからそっちへ送ったんだ。土地でも買う資金にしてくれ。」

大船碓禎治がタバコに火をつけながら言った。

「そうなんだ、オツケイ、じゃあ遠慮無しに使わせて貰うよ。」

電話の向こうから靖之の弾んだ声が聞こえた。

「それからな、少しずつ金をそっちへ送るから、定期預金でも作って置いてくれるか。俺も歳だから、そっちへ行つてゆっくりしたくなつたんだ。こっちじゃどこに居てもうるさいからな。買った家もまだ見ていないしな。」

大船碇禎治が少し物思いに耽つた感じで言った。

「おいおい、どうしたんだよ。親父らしくないぜ。もし俺が必要なら帰つても良いんだぜ。」

電話の奥で靖之が心配そうに言った。

「まあな。こっちはこっちで色々と面倒な事があってな。たまには俺でも弱気になる事もあるさ。まあその時は頼むわ。おっと誰か来たようだ、じゃ、頼むぜ。」

それだけ言って大船碇禎治は受話器を置いた。

身代わり

「おい、ちょっと出掛けてくるぜ。」

大船碓禎治が玄関の式台に立った。

「あつ、親分。どちらへ。」

そこにいた若衆が驚いて聞いた。

「どこでもいいじゃねえか。携帯電話は持っていくが、2時間ぐらいはならすんじゃねえぞ。」

「へい。じゃ車を回してきます。」

若衆が飛び出そうとするのを大船碓禎治は制して言った。

「待て待て、今日は俺が運転していくから誰も付いて来なくていい。」

大船碓禎治は靴を履いて敷地内の駐車場へと歩き、セルシオにキーを差し

込んだ。V8のエンジンが快さそうに力強く回転の振動を大船碇禎治の身体に伝えてきた。

着いたところは住宅街に埋もれたひっそりとしたモーターだった。電話で聞いていた部屋番号へと車を進め、そのガレージへと入れた。部屋へ入ると既に風呂を済ませ妖艶な姿態にバスタオルだけを巻き付けた晴美が迎えた。

「遅かったわねえ。もう待ちくたびれたわよ。お詫びに思いっ切りかわいがってもらおうわよ。」

「馬鹿、俺だって忙しい身体なんだ。はいそうですかって出掛ける訳にはいかないんだぜ。それよりか、お前の方で気が付いちゃいないか。中沢がど

うも俺達の事に気づいた様子があるんだ。」

大船碇禎治はすがりつく晴美を押しつけるようにしてイスに腰を降ろしタバコを取り出し火を点けながら言った。

「えっ、どうしたのよ。そんな事ないわよ。わたしの所へ来てもそんな事何も言わないし。忙しそうにしているだけよ。」

晴美も大船碇の横に腰を降ろして言った。

「ならいいんだ。でもやっぱり気になる。そろそろ俺達もおしまいにしなくちやなあ。」

「どうして、どうしてなのよ。そんなのいや。イヤよ。」

大船碇禎治の言葉に晴美が驚いて立ち上がり、すがりついて言った。

「なあ考えてもみるよ。俺達の事が中沢にばれた時の事を。俺達はどちらも生きては居られないんだぜ。」

大船碇禎治は晴美の両肩を握ってその身体を揺すりながら言った。

「でも、イヤ。別れるなんて。」

晴美は目に涙を溜め、か細い声で首を大きく振りながら言った。

「よしよし、もう泣くな。俺は風呂に入ってくる。」

大船碇禎治は晴美の身体を離して立ち上がり風呂場へと行った。タオルに石鹸を塗りつけて自分で身体を流し始めた時に、後ろの扉がそろっと開き、

「背中流しましょうか。」

と晴美が入ってきた。

「おう、じゃ流してもらおうか。」

と伸ばされた晴美の手にタオルを大船碇が渡した。晴美は渡されたタオルを手にしたまま、大船碇禎治の背中を見つめた。

「おい、どうしたんだ風邪を引くじゃねえか。」

大船碇禎治の言葉にハツとした晴美が

「あっ、ごめんなさい。」

と言って大船碇の背中をこすり始め、すぐその手を止め背中にむしゃぶり

ついた。

「いや、別れるなんてイヤ。」

「そんなこと言たってしょうがねえだろう。お前は姐さんだし、俺は傘下の組長だぜ。見つかったらそれこそお終いだ。いつまでもめそめそしてねえで。俺は風呂に入るぜ。」

背中の晴美を振りほどいて大船碇は浴槽へと入った。

「じゃ、本当に今日が最後ね。だったら思いっ切り愛してちょうだい。」

晴美が洗い場で下を向いたまま言った。

「よしよし、じゃあこちらへ入いな。」

大船碇は浴槽に晴美の入る余地を作ってやって言った。

「いいの、いいから首のここを絞めて。ああいい、来て、もっともっと…
強く。駄目もっと強く、うっ、うっ、いいわあ。」

大船碇禎治は今までの晴美から、聞かされた事のない注文に一瞬ドギマギしたが、首を少し絞めた時に晴美の下半身に起こる痙攣に自分自身も大きな高揚を受け今までに無い快感を享受し、

「おう、こんな事誰に教わったんだ。」

ついで言葉で聞いてしまった。

「いや、そんなこと聞いちゃ。もっと続けて。いい、いい。もっと強く。」

「おっ、おっ、待てよ、これじゃ俺も早くからいっちなうじゃねえか。」

大船碇禎治が手を離して言った。

「駄目よ。離しちゃ。いっても良いから、続けて。そう、強く、駄目。もっと強く。グフツ。いい。いい。いいわあ。」

「よし、なら、これでどうだ。」

「ぐふっ、ぐふっ。いい…いいわあ。ぐふっ。」

「行く、行く。いくぜえ。」

大船碇禎治が大きく射精をしたのち、晴美の身体から離れた。

「今日のお前は凄かったぜ。こんな遊びが有るなら何故もつと前に教えなかつたんだ。」

大船碇が背を向けて言ったが、晴美は黙ったままだ。ふと大船碇が振り返って晴美を見た。彼女の胸の動きが見えない。大船碇は慌てて抱き上げてみた。晴美の手は引力に逆らうことが出来ない様に垂れ下がったままだ。

「おい、どうした。おい。」

大船碇は晴美を何度も揺すった。しかし目も閉じられたままで身体の総てから力が抜けきっていた。大船碇禎治は焦った。今ここで救急車を呼ぶわけには行かない。それに晴美は完全に死んでいる。殺意が有って殺した訳では

勿論ない。事故なんだ。でもそれを言っても誰も聞いてはくれないだろう。

これで俺の組も俺自身もお終いだ。何て事だ。大船碓禎治は自分で自分の頭を叩いた。そんなことをしてもどうなる事でもないのだ。考えろ。考えて何らかの打開策を見つけたせ。ふとテーブルの上に乗っている携帯電話を見た。

「そうだ、誰かを身代わりにすればいい。誰だ。誰がいい。」

大船碓禎治はつぶやいた。舎弟の名前を順番に考えて行った、続いて代貸し。

「そうだ、坂本だ。あいつならやれそうだ。」

指名する人間を見つけたし、電話機を取り上げた。しかし、まだ気持ち

動揺している。大船碇は冷蔵庫からビールを取り出し、一息に飲み干した。

「おう、俺だ坂本はいるか。」

大船碇禎治が組に電話を入れた。

「おう、坂本か。今から俺が言う通りにしろ。判ったな。側に誰かいるのか。」

「いえ、俺だけです。」

組長から直接声をかけられた坂本が電話の向こうでおどおどした声で言った。

「そうか、よく聞くんぞ。お前、今からリンカーンを転がして、山上町

の桜山モーテルの前に停める。そうだ良く聞け。そして車をロックして3号室のドアを3回軽く叩け。そうしたら俺が出る。判ったな。誰にも言うんじゃないぞ。どこへ行くと聞かれたら俺を迎えに行くと言え。判ったな。今すぐ出ろ。」

「はい、判りました。」

電話が切れてから15分ほどでドアが打ち合わせどおり叩かれた。

「よし、入れ。」

ドアを開けて大船碓禎治が坂本を入れ、ドアの外へ顔を出して周囲を見た。誰もつけている奴はなさそうだ。

「よし、ちゃんと言った通りにしたたろうな。」

「はい、誰にも何も聞かれませんでした。」

坂本は組長直々の呼び出しでまごつきながら答えた。

「それならよし。まあそこへ座れ。」

大船碇禎治は応接イスを指さし自分もその向かいに座った。

「おう、お前を男と見込んで頼みが有る。俺の頼みが聞けるか。」

「はい、な、何でも聞きます。」

坂本はここからどこかへと鉄砲玉として送られるのでは無いかと思い、ビクビクしながら返事を返した。

「そう堅くなるな。お前に楽しい思いをさせてやろうとしているのだ。もし俺の言うことを聞けば、お前を舎弟に迎えてやろう。いや、兄弟としてやってもいい。しかもシマも持たせてやるぜ。どうだ気分がいいだろう。」

大船碇禎治が言った。

「は、はい。そんな大それた事が俺に出来るんですか。」

「なに、お前が考える程大それたことじゃあねえ。ちょっと2年ほどムシヨ暮らしをしてきてくれればいいって事だ。約束通り帰ってきたらハク付きでお前は俺の兄弟分よ。どうだ出来るか。」

大船碇禎治の言葉を聞きながら坂本は考えた。話の内容から考えて命がな

くなる事は無さそうだ。しかし話が余りにもうますぎる。断ればこの世界では生きていられないだろう。どんな話しても乗るしかないと決めた。

「はい、判りました。組長の為なら何でもさせて頂きます。」

「よし、それでこそお前は男だ。心して聞けよ。お前は女をここへ連れ込んだ。そうだ女を連れ込んだ事にするんだ。そうして普通にあれを楽しんでいるあいだに、女が首を絞めてくれと頼む。そうすれば気持ちがいいからだ。そこで誤って強く絞めすぎて気が付いたら相手が死んでいた。そこでモーテルの事務所に電話をして救急車を呼ばせるのだ。勿論さつがくる。そうしたら今俺が言った通りに言うんだ。間違って殺してしまったと言うんだぞ。そ

うしないと過失と殺人とは大きな違いが出る。それはお前でも判るだろう。どうだ。」

「へい、わかります。」

「そうなればせいぜい2年で出てこられる。弁護士は最高のを俺が付けてやるから安心して行ってこい。判ったな。」

「はい、判りました。その女と言うのは誰ですか。」

坂本が聞いた。

「バカヤロウ。まだ話の途中じゃねえか。良く聞け。その女はそのベッドで寝ている。俺が出ていったあと、お前は裸になって風呂でも入れ。そう

してやりたければその女を犯ってもいい。それから俺が先に言ったようにしろ。これがセルシオのキーだ。お前のリンカーンのキーをよこせ。それから女の事だが、お前の知らない女だ。道で引っかけた事にしろ。判ったな。」

「はい、判りました。組長よろしくお願いします。」

坂本が立ち上がり頭を下げた。

「よし、あとは任せておけ。頼んだぞ。」

大船碇禎治は立ち上がり坂本の手を握り言い、キーを受け取り部屋から出ていった。ドアを開けるときもモーターから出るときも廻りを見回し、誰もいないことを確認してリンカーンのドアを開け、運転席へと座った時に大船

碓禎治は全身の力が抜けるのを感じた。しばらくイスに身を任せてからキーを差し込みエンジンを始動させた。快い振動が大船碓禎治の身体を包んだ。

「これで俺は安泰だ。」

大船碓禎治はつぶやいて車を走らせた。モーターの影から密かに見ている者のあるのを知らずに。

崩壊

そんなある日、江沢会の江沢卓也から大船碇禎治は電話を受けた。

「久し振りやのう。景気はどうだ。ちょっとお前さんに相談事が出来ちまつてなあ。久し振りに会わねえか。」

江沢卓也は関西から進出してきた全国組織の山脇会から送り込まれた、いわば後発傘下の大船碇組などの目付役だ。いつも真っ白なスーツに身を固め、廻りに10人程のボディガードを引き連れている。サングラスを外したのを

見たことが無いので本当の顔を見た千葉県内の組長はいない。それぞれの組内部で不穏な動きなどを見つけたらいち早く本部へと注進するスパイのような奴だ。その上、本部から千葉と言うシマを自分が貰ったかのように、常に大船碓禎治などの上に君臨したかのような振る舞いをする。虫の好かない奴だが、本部の人間である以上無碍に断る訳にもいかない。

「そうだな。久し振りだから銀座へでも足を伸ばすか。」

大船碓禎治が答えた。

「いやいや、そんな時間は勿体ない。ちょっと話したい事があるので、おやっさん一人でリンカーンを運転して俺を迎えに来てくれないか。パークホ

テルの玄関で3時。この時間なら無理はねえだろう。ほんの10分程で済む話だ。待ってるぜ。」

大船碇禎治が次の言葉を出す前に電話は一方的に切られていた。

「なんだあの野郎、勝手なことばかりほざきやがって。俺一人で来いだと。何様だと思ってやがる。それにしても、今時奴から電話をしてくるなんて薄気味悪い事だ。別に組の中でトラブルがある訳でもなし。廻りとも仲良しくラブこっこをしているし。」

受話器を見つめながら大船碇禎治はつぶやいた。

それでもその薄気味悪さが勝り、大船碇禎治は1時間程時間つぶしをした

のちにリンカーンを運転してパークホテルの玄関へとつけた。同時にドアボ
ーイではなく、いつもの白いスーツに身を包んだ江沢卓也が運転席のドアを
開け、

「おやっさん、俺が運転するから、そっちへ移ってくれませんか。」
と言って、身体を運転席へと入れた。仕方なく大船碇禎治は助手席へと移
動した。

「へへっ、こんな話は車の中が一番なんでね。まあ行き先は任せてくださ
い。」

江沢は慣れた手つきでリンカーンをホテルの玄関から滑り出させた。

「聞くところによると、おやっさんの息子。何て名前でしたっけ。あのオストラリアへ行っている。そうそう頼之さんでしたな。随分と稼いでいるそうじゃないですか。まあ結構なことですけど、ちょっと相手を見て商売はしてもらわな困りますぜ。」

助手席の大船碇禎治に目を配りながら運転を続け江沢が言った。

「何の事だ。」

事実息子がやっている商売に関しては全く知らない大船碇禎治が聞いた。

「おやっさんも御存じの関西の親分が姐さんに買ってやったゴールドコーストの別荘なんです。おやっさんの孝行息子が売りつけたらしいんです。」

まあそれまでは商売だから何も問題はありませぬ。ま、しかし、その売りつけた値段があとで問題になりましたンや。何でも、聞いた話ですが8000万円程度の家に1億6000万円も払わせられたそうです。ちょっと玉取れなんて話しになったそうですが、騙された方も悪いと本部の方で留めたそうです。」

聞いて、大船碓禎治は靖之ならばやりそうな事だと思ったが、
「靖之が売ったと言うのは不動産の仲介だけじゃあないのか。」
と聞いた。

「へへへ、そう言うと思ってましたよ。ちゃんと俺が行って調べてきまし

た。それがなんと売り主はおやつさんなんですよ。厳密に言えばおやつさんの作ったオーストラリアの会社なんですがね。」

車は静かな住宅街をゆっくりとした速度で走っている。

「待て、俺はオーストラリアなんかで会社なんか持っていないぞ。」

大船碇禎治が言った。

「そうですね。会社の登記関係は登記所のコンピューターで閲覧できますけど、書類関係は税理士の所に保管されているんです。まあその税理士まで行ってきましたよ。その書類には素晴らしい筆跡で大船碇禎治と書かれています。でも俺にはピンと来ませんでした。これはおやつさんじゃあ無いとね。」

だっておやっさんは英語なんて書けやしませんよねえ。と言う事は、おやっさんの名前を使って作った会社を利用して中抜き取引をしているのは息子さんじゃありませんかねえ。」

江沢が車を停めて、大船碇禎治に身体の向きを変え言った。

「江沢さん良く判った。近々俺がオーストラリアへ行って靖之から一切を聞き出してくるぜ。」

大船碇もこれ以上とぼけられないと考え言った。実際、近々にオーストラリアへとは行くつもりだった。

「じゃ、この話は終わりにして、もう一つの話ですわ。」

「何だまだあるのか。」

「へい、俺もあっちこっち走らされて結構ふところが寂しくなってきたので、おやっさんに助けてもらおうと思っているんです。」

江沢が言葉は丁寧だが、強い押しつけを感じた大船碇禎治が言った。

「待てよ、上納金は間違いなく納めているぜ。その上に何がいるんだ。」

「いやいや、上納金なんかの事じゃ無くて、俺自身のふところ具合の話しなんです。」

江沢が背広の襟を持って内ポケットが見える様に広げて見せた。

「ふざけんじゃないやねえ。何で俺がためえのふところを満たしてやらなくちゃ

ならねえんだ。」

大船碓禎治が怒気を含んで言った。

「まあまあ、おやっさんそう怒りなさんな。ところで、1ヶ月前でしたかなあ、お宅の坂本君でしたか、中沢ンとこの姐さんを殺して刑務所へ行ったのは。そうそうそのモーターって確かここでしたよね。」

大船碓禎治は言われて、外の景色を始めて見た。なんとそこは桜山モーターの前だった。しかもリンカーンが停まっている所は、大船碓が乗り換えた場所である。大船碓禎治の顔が硬直した。

「あの坂本君は可哀想な事をしましたねえ。いや、そんな話は別にして、

おやっさん、ちょっと1000万程都合をつけてはくれませんか。俺は使い走りばかりやらされているのでシマを持っていないみたいなんで、若い衆養うにも苦しいんですわ。何とか助けてやってください。」

大船碇禎治の硬直した頭には江沢の言葉も入ってこない。

「ね、親分。1000万。いつ頼めますかい。」

江沢の再度の催促でふと我に返った大船碇禎治が言った。

「よし、1000万だな。明日昼過ぎに取りに來い。」

「判りました。さすが大船碇組の組長さんだ景気がいいや。」

江沢がそう言って窓から合図をすると一台のベンツが横付けされた。

「じゃあ、おやっさん明日またお目にかかります。お気をつけて運転してください。」

と江沢が言ってベンツの後部座席に身体を移した。

しばらく唖然としていた大船碇禎治だが、

「奴は知っている。奴は知っている。」

とつぶやいた。

弁護士事務所の崩壊

数日後、熊谷弁護士事務所の会議室に3人の弁護士と内田遥香が揃った。

「みんなも内田君から聞いただろうが、熊谷弁護士が客の金に手をつけたと言う事はひいては我々の立場にも響いて来るはずだ。亀川さんは熊谷弁護士のお客さんだからとは言え、ここにこうして働いている我々にも飛び火は必ず来る。そこで僕は今日限りでここを辞めようと考えている。今僕が持っているお客さんは30人程だがこれを総て持ってゴールドコーストの知り

合い弁護士事務所へと移籍するつもりだ。撲自身の決意は今言った通りだが、みんなの気持ちも聞かせて貰いたい。」

熊谷弁護士事務所では最高の知識と実力を備えている吉川が言った。

「吉川さんは顔が広いからいいなあ。僕なんか事務関係だけだったので、他の事務所との繋がりが無いからどうすることも出来ませんよ。」

内山弁護士がつぶやいた。

「何を言っているんだ。もし君がここに残ったら、委任状を君が作ったなんて言い出しかねない人だからな熊谷さんは。そんな扱いを受けてもいいのかい。」

吉川が内山に言った。

「それは困るけど、昨日の今日では就職先も無いし、僕みたいな弁護士のたまごは雇ってってくれる所は無いんじゃないかな。こんな事になるなんて考えでもみなかったから蓄えも無いし。」

内山が芯から困ったように言った。

「俺は、吉川君と同じ意見だな。俺も今まで次の就職先なんて考えていなかったから不安は有るが、もし今のまままでいたら犯罪者にさせられるかも知れないしな。」

横から河村弁護士が言った。

「よし判った。内山君もすぐに就職先が有れば移りたいと言う事と解釈して良いんだね。」

吉川が内山に返事を求めた。

「そりゃあ、出来たらそれに越したことはありませんよ。僕はここにいても先輩二人が総ての仕事をするので直接のお客さんを持っていませんしね。もしお二人が出られても知識と経験の無い僕にはあの先生に代わってここを運営する力も有りませんからね。」

内山弁護士が言った。

「よし決まった。既に内田女史には了解を貰っているので。4人揃ってゴ

「イルドコーストへ移籍しよう。そうすれば熊谷先生の2人の客は先生に任せて、それ以外のここの客は総てをそちらへと持っていけるからな。歓迎されるぞ。」

吉川が言った。

「なーんだ。そんな話しになっているのですか。吉川さんも人が悪い。」

内山弁護士が言った。

「それにね、それぞれの宿舎が決まるまでは1軒の家まで貸してくれるそうなんだ。ウォーターフロントの家だそうだ。部屋もちゃんと4つ有るそうだぞ。」

吉川が付け足した。

「えーそれは凄い。そんな話ならもっと前でもよかったのに。」

河村も言った。

「じゃあ、今日でこの事務所は熊谷弁護士だけが残ることになる。それぞれこの用紙にサインをしてくれ。」

吉川が出した書類はそれぞれの名前が打ち込まれた退職届けだった。

「さすが吉川さんだ。用意周到。でもね。熊谷先生がこれを読めるンでしようか。」

「内山君、何言ってるんだ、そんなこと当たり前じゃないか。」

河村が言った。

「でも、これって英語ですよ。」

内山の言葉に全員が声を合わせて笑った。

ダルビー警察署

白骨死体発見後、しばらくの間はダルビー警察署からは何の連絡もなく、香山も小野原も二人の会話の中から事件の話題は消えていた。しかしあの事

件以来二人は共同して河川底探索に出掛けるようになっていた。そんなある日、香山の携帯電話で殺人課のジェイソン課長からの言葉を受けた。

「その節は失礼しました。早速ですが、例の白骨死体の身許が未だに判らないのです。ただ当地には無いワイシャツのクリーニングマーク様なものと、背広の生地から外国人、特に東洋人と言う感触を得ているのです。勿論、体型などからでも東洋系人だと考えているので、暇な時で結構ですから署まで起こし頂いてマークなどを見て頂きたいのです。いわば協力をお願いしたいのです。」

ジェイソン課長の言葉は丁寧そのものだった。

「ジェイソン課長が小野原さんに協力してくれと言ってきましたよ。」

今日は夕食当番が香山で、メニューは野菜ふんだんの焼き肉だ。テーブルにポータブルコンロを置き、共に肉や野菜を焼いている時にビールをうまそうに呑んで香山が小野原に言った。

「へー、まだ身許すら掴めていなかったんですね。あれからもうかれこれ1ヶ月が過ぎるでしょう。こちらの警察はのんびりだなあ。じゃ、明日にでも行きますか。」

「でもねえ、わたしはあんまり行きたくはないのです。最初に殺人犯と思われただけでも気分が悪いのに。また彼の顔を見ると腹が立ってくるような

「気がするんですわ。」

香山が気が進まない様な顔で言った。

「それは困りますよ。香山さんが行ってくれなかったら通訳が無いじゃないですか。」

小野原が肉をほおばりながら言った。

「何を言ってるんです。もう小野原さんに通訳なんか要らないでしょう。」

「いやいや、香山さんは治安判事でもあるし、警察用語を英語で出来るじゃないですか。わたしはまだ生活用語だけですからね。お願いしますよ。」

小野原は既に捜査に参加する気である。やはり警察官根性は死ぬまで抜け

そうに無い。

「まあ毎日が暇人ですから、良いですけどねえ。」

「香山さんには言ってませんでした。恐竜を勉強している時にわたしは恐竜探偵になってやろうと思ったのです。だからそれが本物の探偵になってもかまわないじゃないですか。ひよっとしたら面白い人生が送れるかも知れませんよ。」

小野原が誘い水を送った。

「ほう、そうですか。じゃあ、小野原さんがシャーロックホームズでわたしはワトソンですな。そう考えたら面白そうですね。」

香山も乗ってきた。

翌日、早朝から車を走らせ、ダルビーの町中でワレゴハイウェイ添いにある警察署へと入った。

既にジェイソン課長も出署しており、二人は案内されて警察署の一番奥にある死体安置室へと足を進めた。そこには白骨が元通り組み立てられてステレスのテーブルの上に寝かせてあった。

「散逸した人骨を元の骨格に組み立てる方法はね、最初に腰の部分の寛骨と中央の仙骨を組み合わせて骨盤をつくり、これを基にして脊椎骨を一番下の第5腰椎から順に上に並べて行くんです。そしてそれに頸椎をつなげ、そ

の第1頸椎の上に頭蓋骨を乗せるでしょう。続いて下肢の組み立てをするのです。骨盤と大腿骨を結合して、その下に頸骨をつける。頸骨の下は足骨を並べるのですが、左右の骨が混じり合っているので一つ一つ見分けながら並べて行き、最後に足首から指先迄の骨を右左確認しながら並べます。そして最後の作業に上肢ですね。腕が終わると手の骨を組み立ててジグソーパズルが完了するのですよ。」

小野原が香山に説明してくれた。

「なるほど、わたしはジグソーパズルの愛好者ですし、恐竜の組み立てに近いものですから何となく判ります。でも人骨のパズルはやりたくないです

なあ。」

二人が話している間にジェイソン課長と課員と見られる制服警官が別のテーブル上に白骨死体が所持、着用していたそれぞれの物を並べていた。

「何を話しているのです。」

ジェイソン課長が香山に尋ねた。

「今、小野原さんがこの骨パズルの組み立て方を教えてくれたので
す。」

香山が答えた。

「なるほど。じゃ、とりあえず電話で話しましたワイシャツから見てもら

いましょうか。」

と、別のテーブルに向きを変えて指さして言葉を継いだ。

「これなんです、この赤い糸で字のような記号があるでしょう。貴方は何だと考えますか。」

香山も小野原も指さされた部分を見て、一目でわかった。実際通訳なんか不要だが香山は小野原に

「このマークを見て何だと思うと聞いていますが、一目でわかりますよね我々には。」

と言った。

「そうですね。100パーセント日本人ですね。しかも左側の小指の第一関節から先がありません。第二関節の先端に刃物跡が見受けられるので人為的に切断されたものと考えます。日本人でしかも小指が無いとなれば、やぐざ。いわゆるジャパニーズマフィヤです。」

香山に向かって話していた言葉を途中から英語に換えてジェイソン課長に向かって小野原が話した。

「そうですね。やはり我々も日本人では無いかと考えていたのです。早速インターポールを通じて日本の警察庁に依頼をする事にします。」

ジェイソン課長が言った。

「何でしたら、今から日本の警視庁へ電話を入れてわたしが聞いて見ましようか。」

小野原がジェイソン課長に向かって言った。

「おう、それは良い。ではこちらの電話を使ってください。」

ジェイソン課長が1分でも早い方が良いと電話機を指さしたので、小野原は元の古巢の日比谷署へ電話をした。

「元、1課にいた小野原勉です。山本君をお願いします。」

電話の向こうでは課長が叱咤激励している声が聞こえる。小野原は久し振りに聞くその声を懐かしく聞いていた。1分程で山本が出た。

「珍しいですねえ。オーストラリアへ行ったと聞いていたのですが、帰って来ているのですか。」

「いやいや、今オーストラリアから電話をしているんだよ。みんな忙しそうだね。電話の後ろからピンピン聞こえてくるよ。」

小野原が言った。

「ええ、昨年の暮れから連続殺人事件がありました。一昨日前に同様手口で4人目の被害者が出たのです。だから課長が必死になって叫んでいるのが聞こえるでしょう。」

「なるほどねえ。忙しいところ申し訳ないんだが、ちょっと調べて貰いた

い事が出来たんだ。実はこの電話もクイーンズランド州のダルビー警察からかけているんだが、こちらでの殺人事件の第一発見者に僕がなって今はその捜査に協力する事になってしまったんだ。」

「へー、小野原さんらしいですね。それで何を調べたらいいんですか。」

「うん、ここ一年ぐらい前からオーストラリアに来て行方不明になっている丸暴関係者がいないかを知りたいんだ。」

小野原が一言一言確実に伝わる様に言った。

「丸暴でも小者は判りませんが、大物が一人おりますよ。」

「なんだと。」

小野原が叫んだ。

「その名前は判るか。」

「ええ、そんなにおおきな声で言わなくても判りますよ。名前はね、えーと、大船碇、確か大船碇禎治って名前でしたよ。千葉の大船碇組の組長です。

僕の友人と一緒に呑んでいる時に漏らしたのですが、3ヶ月のピザでオーストラリアへ行ったきり帰国しないと言う話でしたよ。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。」

小野原が受話器を押さえて香山に言った。

「香山さん、そのネームを見てくれませんか。オオフナトと読めません

か。」

「ええ、言われたらオオフと読めますね。」

香山が答えた。

「おい、山本君。その君の友達に連絡してその人間がわたしの住んでいるダルビーって所で白骨死体で発見されていると伝えてくれ。今、現在、わたしの目の前でその白骨死体が寝ているんだ。」

小野原勉がせき込んで山本に言った。

「判りました。すぐ連絡してそちらに折り返し電話をさせます。」

電話はすぐに切れた。

「この人物の身許が判明しましたよ。名前は大船碇禎治。千葉県のやくざの親分でした。」

小野原勉が英語でジェイソン課長に伝えた。

「おう、さすが日本の警察だ。素晴らしい。ありがとう。」

ジェイソン課長が小野原の手を両の手で握り頭を下げた。

大船碇禎治逃避計画

「靖之、お前がやっている事は関西の方でも見通されているんだぜ。下手なことをすると金だけじゃなくて、タマまで取られちまうぜ」

オーストラリアへ来て、豪勢なネラング川に面したウォーターフロントの別荘で大船碇禎治が息子の靖之に言った。

「へえ、俺もそんなに有名人になったか。日本に帰ったら親父の跡継ぎで一躍羽ばたけるようになるかもな。」

靖之が親父の消沈に比べて、逆にはしゃいだ声で言った。

「バカヤロウ。お前が俺の跡目を継ぐ線はもう無いだろうよ。」

「なんでだ。親父には俺しか男の子供はねえんだぜ。跡目は俺って決まっていたんだろう。」

靖之は親父のか細い返事に、強く言葉を返した。

「まあな、お前がこっちにいるあいだに色々とした事が有って、そろそろ俺も身を引かなくっちゃならねえ事になりそうなんだ。下手すると俺のタマを取られる事もあるだろうよ。まあそうなっちゃ、お前にまで手が伸びるかもしれないねえが。」

靖之は親父がブツブツと言う言葉を逐一かみ殺して聞いた。

「何だよ。何があったんだよ。」

「まあな。関西のスパイ野郎が俺のまづいところを見つけやがって、ここへくる前にちよっと脅しをかけて来やがったんだ。今のところは1000万円をやって黙らせているが、これからちよくちよく金をせびりに来るだろう。金の有る内は黙らせる事も出来るだろうが、無くなれば俺のタマは無くなる程の事だ。」

靖之の言葉に大船碇禎治が答えた。

「なんだよ。親父。何をやったんだ。」

「別に組をどうか、山脇会に義理を欠いたという訳ではないんだ。まあ個人的な問題だ。」

靖之は親父のその言葉を聞いて、あつ、女がからんでいるなど判断して言った。

「よし、判った。それで親父はどうするつもりなんだ。」

「そうよなあ、金をまとめてこっちへ持ってきて組から逃げ出す事でもするか。」

「なに言ってるんだ。そんなことで解決出来るって問題でも無いだろう。そのスパイ野郎を消してしまう訳にはいかねえのか。」

靖之が言った。

「バカヤロウ。それこそ墓穴を掘るようなもんじゃねえか。」

「そうか親父がそう言うなら・・・じゃ、ここで決めてしまおう。まだそうせっぱ詰まっている様子じゃ無さそうだから、親父は一旦日本へ帰る。そうして出来るだけ組の金をこっちへ送れ。明日銀行に別の口座を幾つか作ってくる。そこへありったけの金を送ってくるんだ。あとはうまい時期を見つけて日本から蒸発しな。親父がどこかを半年ぐらいほつつき歩いてこっちへ来た段階で、俺がうまい隠れ家を用意しておいてやる。」

大船碇禎治は期待していた靖之の言葉に満足そうにうなずいて言った。

「よし、そうと決まれば今夜はうまいもんでも食いに出るか。」

江東区にある早川建設本社社長室に帰った早川浩一は専務の北見を呼んだ。

「北見君、公共工事の見通しはそこどうなっているかね。」

「はい、国はそろそろ期限が切れるので入札参加が許されると思いますが、まだ都の方は堅くて少なくとも復帰できるまでにはあと3ヶ月は待たなくてはならないと思います。」

北見が答えた。

「そうか、そうすれば営業はとりあえず国関係を重点とした方がいいな。

民間の進捗状況はどうかね。」

「民間は社長の関連されている。エムバック社からの受注が順調ですから、昨年度に比べて200パーセントの伸びを示しています。」

「ふむ、エムバック社以外の分はどうかね。」

「そちらの方も最近の建築ブームとマンションの建て替えなどが入り、同じく約200パーセントの伸びです。」

北見の言葉にうなずきながら

「そうか、国関係の工事が復活すれば恐れる事は無くなったと言う事だな。」

早川浩一が言った。

「はい、しかし、これまで3ヶ月間の指名停止はかなり資金的な問題点を残しました。下請け関係は一応、民間工事へとかなり振り分けましたが、半数が縁切れ状態です。」

北見が意見として加えた。

「俺の個人的な話だが、オーストラリアで大学まで卒業して弁護士事務所を始めた息子が、やはりぼんくらまでは直っていなかった。そこでだ、実際、

俺ももう歳でもあるし、そろそろ引退して息子の応援をしてやろうと考え出したのだ。会社も沈没を免れた様子だし、いっそのこと俺は会長職へと退くから、君が社長をやってはくれないか。」

早川の突然の言葉に一瞬ビックリした北見だ。早川に息子が居る以上、自分が社長になれる目は100パーセント無いと諦めていた。それが目の前に手の届く所へと来た。後は手を伸ばして掴むだけだ。しかし、現状で社長を引き継ぐには随分と大きなリスクがある。社長には楽観的な意見を具申したが、実際の所は火の車だった。それでも社長と言うポストには何にも代え難い魅力がある。

「わたしこときの若輩を社長の後継としてお考え下さった事は謹啓に耐えません。もしその様な事になりましたら身命を賭してでも会社に忠誠を置き、建て直しと進展に寄与したいと思えます。」

北見が机に手をついて言った。

「そうかそうか、了承してくれるか。そしたら早速取締役会を開いて貰おうか。それから臨時株主総会だな。俺としたら早い方が良いからな。そうそう退職金も考えて置いてくれよな。」

早川が最後の言葉は声を細めて言った。

「はっ、それはもう。お任せ下さい。」

翌日開催された取締役会で早川社長退任、会長職就任の決議がなされ、北見社長が誕生した。席上、早川会長に対して50余年間の功績が讃えられ、退職金8億円の支給が決議された。

密謀

「初恵か、俺もやっと自由時間を持てる様になった。そこで俺はそっち

へ行って住むことにした。こっちの家などの財産は古女房にやって、来週にはそっちへと行けるだろう。」

早川から初恵の住むゴールドコーストへ電話がかかってきた。

「お父さんが、こっちへ来て住むって電話があったわよ。」

初恵が経営する日本食レストランへ夕食の為に立ち寄った征次に言った。

「えーそれは無いぜ。話が違うじゃないか。こっちは俺達だけが住むって事じゃなかったのかよ。」

征次が口を尖らせて言った。

「汚いわねえ、口の中身を飛ばさないでちょうだい。でも仕方がないじゃ

ないの。」

初恵が胸に飛んだ征次の食べかすを手で払いながら言った。

「なんでもかんでもお前は仕方がないで片づけてしまうから、俺が一番苦労するじゃないか。もういいや。」

征次は食事も中途に立ち上がってレストランから出ていった。親父が日本へと帰った翌日、征次は母親の留守を好いことに家捜しをして、母親がへそくっていた2000万円の現金と、親父が金庫に入れていた1500万円の現金を手に入れていた。

「馬鹿親ばかりだ。何とか金を作らなくては・・・」

車をカジノへと向けて走らせている最中、ふと亀井靖之の顔を思い浮かべた。そうだ靖之さんに相談してみよう。車を走らせながら携帯電話からダイヤルした。

「亀井さん、御無沙汰してます。征次です。」

「征次君久し振りだねえ。忙しいんだろう。今日は何だね。」

電話の向こうから元気そうな靖之の声が帰ってきた。

「実は、ちょっとご相談したい事が出来まして時間を作っただけませんか。」

征次が聞いた。

「どうしたい。弁護士先生が相談したいなんて。反対じゃないのか。いいよいつでも。」

冗談口で靖之が言った。

「今はどちらに居ます？」

「今、今はカジノに居るよ。」

「えっ、そうなんですか。じゃあすぐそちらへ行きますから。」

電話を切ると征次はアクセルを踏んだ。

「どうしたい。それにしても早いねえ。どこから電話をしていたんだい。」

VIPルームのバーへと飛び込んだ征次をいち早く見付けた亀井靖之が

言った。

「すぐ前を車で走っていただけなのでね。それよりか靖之さんに助けて貰いたい事が出来たのです。晩飯は食べました？」

「どうしたんだい。飯はここで一口ビールを飲んだだけだよ。どこか食べに行くか？」

「ええ、ちょっと静かな所で話したいんです。」

征次が言った。

「静かなところねえ。」

「そうです。どこか知りませんか。」

「静かなところだったって、そんなに流行っていないレストランなんてゴールドコースト中探したって無いぜ。いっそホテルのスイートでも借りて飯を食おうか。」

靖之がアイデアを出した。

「あっ、それ良いですね。じゃ、撲、部屋を取ってきます。」

征次がフロントへと行こうとするのを亀井が制した。

「馬鹿だなあ。何のためにここの会員になっているんだ。聞くところに拠ると君は随分とカジノに寄付をしているそうじゃないか。君のカードを貸しなさい。」

征次からカードを受け取って、亀井は手を挙げてウェイトレスを呼んだ。

「君、このカードをチェックしてスイートルームを今から確保してくれ。食事をするだけで宿泊をする訳では無い。ついでに中華レストランから2人分のセット料理を部屋に運ぶ様にしてくれ。」

亀井は言っただけでカードを渡し、

「部屋さえ空いていれば、ただだよ。」

征次に向かって、ウィンクをしたと言った。

「へー、そんなことが出来るんですか。」

判らないと言った感じで征次が言った。

「何だ、毎日毎日通い詰めて居るのにそんなことも知らなかったのか。随分とカジノに奉公したものだなあ。3ヶ月毎に君の掛け金額がコンピュータに積算されており、その額に対して何パーセントかを払い戻してくれて、この建物内での利用金額をその範囲内でただで提供してくれるんだぞ。」

亀井の説明を聞いて征次は今までの負け金額を頭に浮かべ、随分と損をした気持ちになった。

「そうだったんですか。考えたら賭と合わせて随分と損をしたんだなあ。」

「ははは、まあその分を博打で勝てば言いじゃないか。」

部屋が取れましたとバーマネージャーが部屋のカードキーと入室確認書

を届けてきた。

「じゃ、行くか。」

受け取った亀井がせかすように立ち上がった。

「さて、何の話聞かせてくれるのかな。」

部屋に入っても雑談だけで酒を酌み交わしていたのだが、中華料理がテーブルにズラッと並べられ二人がイスに座った段階で箸を取り上げた亀井が征次に言った。

「ええ、実は、本当に話にくいのですが、・・・1億円ぐらい貸して貰え

ないかと思ひまして……」

箸を持った手を下ろして征次がうつむき加減に言った。

「何を言っているんだ。君とてころ見たいな財閥が金を貸してくれなんて。どうしてだ。まず理由を聞こうか。」

亀井はフカヒレの入った碗を手にして言った。

「実は……この前ちょっと大きな勝負をしまして、その時親父がゴールドコーストに来ていたので、金を持ってくる事が出来なかつたのです。だから、陳さんに借りたのです。その支払いが出来ないのでとりあえず亀井さんに借りられないかと……」

征次の声がだんだんと小さくなってくる。

「待て待て、そう言う金の借金申し込みなんて誰も貸さないぜ。お前の親父さんは40億もこっちへ送ってきているって、この前君が言っていたじゃないか。その金を使えば何も問題は無いじゃないか。」

亀井が言った。

「ええ、それは本当なんです。定期預金証書も何もかも僕の事務所ですべて預かっていますから何もかも判っています。でも総て親父自身の名義ですから手の付けようが無いんです。」

今度は征次も顔を上げ、亀井に堂々と説明した。

「ふーん、まあ食べながら考えようや。このフカヒレ。うまいぜ。」

亀井が手に持った碗を持ち上げて征次に言った。

「そうですね。うまいですね。全部ただだと考えたら特にうまさを感じません。」

征次もフカヒレの碗に口を付け一口すすって言った。

「ところで、その定期なんかのサインは誰がしたのだい。」

亀井が豚を焼いて味付けした皮と野菜を小皿へと移しながら聞いた。

「親父は中学しかでていないので英語なんてからっきしだから全部俺がしたよ。」

征次が口一杯の料理をモグモグと噛みながら言葉を出した。

「お前も馬鹿だなあ。それなら一番簡単じゃないか。親父は送ってきた金額は全部判っているのか。送金手数料や色んな費用を引き算したキッチリのお金を。」

亀井が持った箸で征次を指さしながら聞いた。

「そんな事は判っている筈はありませんよ。実際、送ってくる度に何億何千万に小さな数字がくっついていくから、そして何度もだろう。計算もしていかないからだいたいこのぐらいだろうと思っただけ。俺も正確な数字は、うちの吉川君から聞くだけで40億と言う数字だけしか覚えていないく

らいですから。」

「なら、簡単な事じゃないか。明日銀行へ行つて必要な金額を解約してお前の口座に入れて置けば済む事じゃないか。それもあるが、ついでに5億ぐらい余分に引き出して、征次、俺の仕事に投資しないか。今、マンションの建設販売をやろうとしているんだ。これは大きく化けるぞ。サーファーズパラダイスはお前も知っているように今、ハイライズラッシュだろう。しかも値段はうなぎ登りだ。もう土地は契約済みだ。最終取引は今月末。この金は俺の親父が投資する。ビルの設計も終わっているからお前に見せても良い。16階建てだぞ。建設費は親父と俺とで出す考えだったが、お前にも分けて

やろう。そうしたらその1億円ぐらいは簡単に穴埋め出来るぞ。」

亀井の言葉を感じしながら聞いていた征次だ。

「さすが、亀井さんは違うなあ。その若さで、俺の親父より凄い仕事をしているんだ。一旦親父は日本へ帰ったからしばらくは来ないだろうし、・・・

そうだ。亀井さん。明日時間ありますか。一緒に俺の事務所へ行きませんか。」

「あした、明日か。俺も忙しいからな。その親父が使っている銀行はどこなんだ。」

「ナシヨナルとウエストだけど。」

「そうじゃなくって、ブリスベンかゴールドコーストかどちらなんだ。」

「便利が良いようにサーファーズパラダイス支店を使っているよ。」

「なんだそうか。それじゃ、明日プリズベンまで行ってもこっちまで引き返して来なくちゃならないじゃないか。いっそのこと今から行って証書だけ持ってくる事にするか。」

「そうですね。そうしたら朝一番で銀行に行きますね。」

征次もうなずいた。

「よし、そうと決まればこれを早く食おう。」

亀井は顎で料理を指しながら言った。

「あんなところに車を停めて大丈夫なのか。」

征次の弁護士事務所があるビルまで来て地下駐車場へ入るキーを持って来なかった征次に亀井が聞いた。

「大丈夫、大丈夫。この時間は誰も車の移動なんかしないから。」

征次はそのシャッターの真正面にバリケードを張るように車を停めたものだった。

ビル内へは征次が持つカードキーで問題なく入ることが出来た。

「やっぱり事務所街だな。ゴールドコーストと違って人間がいないや。考えてみたら、こんな夜中のプリスペンなんか来たことが無かった。」

変なところで亀井がしんみりと言った。

「さあさあ、入ってください。今電気をつけます。」

征次は言いながら、電気のスイッチを入れ、横にある警報装置の設定解除用ボックスのカバーを外し、テンキーを素早く押した。手慣れたものだと言いは後ろで眺めていた。

「お前はこんな夜中によく来るのか。」

「うん、こっちにもカジノがあるからな。家に帰るのが面倒な時にはここ

で泊まるんだ。」

征次が自分の部屋まで歩き、ドアを開けて言った。

「さすが弁護士先生の事務所だな。随分と綺麗に片づいているな。」

亀井が事務所を眺めて言った。

「なんか今日はいつもと違って綺麗に片づいていますね。いつもは書類が山のように積み上げられているんですよ。まあ綺麗なものいいじゃないですか。」

征次は言いながら事務所の隅にデンと置かれている金庫の前まで歩いた。手には自室から持ってきた小さな紙切れを握っている。その紙切れを見なが

ら金庫のダイヤルを廻し始めた征次に向かつて、

「何だ、お前は金庫のナンバーも知らなかったのか。」

と、亀井が聞いた。

「そうじゃないんだけど、こんなのいちいち覚えなくてもいいじゃん。どこかに書いておけばそれを見て廻せばいいだけだから。」

征次が金庫に耳を付けながら言った。

「馬鹿だなあ。それじゃその紙を見たら誰だってその金庫を開けられるじゃないか。」

「あつ、そうか。でも弁護士事務所なんかへ入る泥棒はいないぜ。書類だ

けしか無いもんだ。」

征次が答えた。

「社員とか別の弁護士なんかに見られたら困るものなんかはどうするんだ。」

「ははは、そんなの無いって。事務所の中では誰も秘密なんて持ってないから。」

征次が言いながら預金証書の束を取り出し、

「これです。結構あるでしょう。」

ずしりと束になった証書類を近くのデスク上に置いた。

「これ全部がゴールドコーストの支店なんだな。」

「そうですね。」

「よし、じゃ、行くか。」

亀井が歩き出すのを征次が止めて言った。

「えー、亀井さんこれ全部持って行くんですか。5億円を選ぶんじゃ無かったんですか。」

「お前も馬鹿だなあ。5億円借りるのも40億円借りるのも一緒じゃないか。そこに使ってくださいって金があるのだから、使ってあげなきゃ可哀想だろう。」

「でも、もしもの事があつたら・・・。」

心配顔でもじもじしている征次に

「いいから、いいから。行こうぜ。」

と亀井がせかせせた。

「でもちょっと待ってください。俺にしたら大きな金なんです。もし親父に見つかったら殺されてしまいますよ。」

征次が言った。

「お前は親父を尊敬しているのか？好きなのか？」

亀井は征次に話の的をそらせた言葉を吐いた。

「何ですよお、そんな。親父を尊敬？だれが？好き？誰を？今更そんなことを聞かれたって返事は全部ノーですよ。」

征次が力を込めて言った。

「じゃ、親父が居なくなれば、その金は全部お前の物じゃないか。遅かれ早かれ親父はあの世へ行くんだ。ちょっと早めに背中を押してやるだけで、今お前が必要な金を使えるんだぞ。」

亀井が静かな声で重々しく言葉を征次に吐いた。

「そ、そんな・・・」

「まあ、考えてもみろ。お前は親父がいつ来るかわからんと言ったな。日

本へ帰ったからしばらくは来ないと言っただろう。そのしばらくは1ヶ月か、1年か？どうだ、そんな期間でお前がこの中から使う金の充填が出来るのか。もし明日にでも来られて見ろ、どうするんだ。」

亀井は征次の前に立ち、

「お前も薄々感づいて居るだろうが、俺の親父はお前と同じで姓が違う。

千葉でも名うてのやくざの親分だ。今、親父もこっちに住んでいるから、俺がうまいシナリオを書いてやる。俺の言う通りにしろ。心配するな。お前は明日から大金持ちだ。」

「ど、どうするんです。」

「まあ、任せておけて。心配しないでその束を持って早く出ようぜ。」
征次は迷ったが、亀井を信じて金庫を閉じ、亀井に続いた。

逃避

「おい、ヤス。この金を靖之へ送ってやってくれ。」

大船碇禎治が組の金を担当させているヤスに言った。

「親父さん、これって、このまとまったやつですかい。」

ヤスが帳簿を示して言った。

「そうよ、その10億だ。」

「だっておやっさん。これは組の金ですぜ。」

「バカヤロウ。組の金でも何でもいいんだ。ちょっと土地を動かして金儲けするんじゃないか。おいヤス。今どき、日本の銀行に金を黙って預けている奴がいるか。考えてもみろ。そんなことして金が増えるなんて事があるか。今、靖之はマンションまで建てて売ろうとしているぐらい羽振りがいいんだ。その尻馬に乗って金を儲けて何故悪い。手前も有り金全部靖之に送れ。儲けさせてくれるぜ。」

大船碓禎治が唾を飛ばしながらヤスに言った。

「へい、判りました。じゃ今日にでも銀行から人を呼んで、送らせておきます。」

ヤスが部屋を出て行ってから、大船碓禎治は考えた。

「これで組の金も大半は送ってしまった。何か売れる物はもうねえか。家を売っちまえばみんなに判るし、よし。」

立ち上がって廊下側の障子をガラツと開けた。側にいた2人の若衆がビツクリしたように飛び上がった。

「おい、出掛けるぜ。」

車に乗って若衆の一人が聞いた。

「親分。どちらへ。」

「おうよ。ちょっと中沢ンとこへ着けてくれるか。」

中沢と言えば隣のシマを縄張りとしている組だ。今は抗争など無いが、境界線はいつでも一触即発状態にある。同行する二人の若衆だけでは、何かがあった時には親分を守りきれぬものではない。若衆同志で目を合わせた。

「何を考えている。戦争をするつもりで行くのではない。ちょっと話をしに行くだけだ、心配しないで行け。」

大船碇禎治も若衆の考えている事は手に取るように判る。安心させるよう

に言って車を走らさせた。案の定、中沢組の事務所前に車を停めた時には、ずらつと取り囲まれた。

「おう、中沢はいるかい。ちょっと大船碇が話しに來たと取り次いでくれないか。」

車の窓を開けて、大船碇禎治が言った。

「へい、ではちょっとお待ちを。」

その中でも少しは格が上そうな骨節の強そうな奴が、大船碇を確認して中へと走り込んだ。

「親父が会うと言ってますんで、どうぞこちらへお入りください。」

その若者が大船碓禎治の扉を開けて言った。

「おつ、そうか。では、そうだ。お前達が入ってくると雰囲気はずくなるだろうから、迎えは俺が電話をするからそれまではちょっと帰っていな。」

大船碓禎治がついてきた若衆二人に言った。

「それでは俺達が若頭にどやされます。」

「よしよし、それは俺がなんとでも言い繕ってやるから心配するな。早く帰えんな。」

大船碓禎治が車を降りて言った。

「じゃ、おやっさん案内しますから、こちらへどうぞ。」

腰を低くしてドアを開けた中沢の若衆が案内した。

「どうする。兄貴。」

一人の車を運転していた若衆が助手席の若衆に聞いた。

「どうするって言ったって。親分が行っちゃまったからしょうがねえだろう。でも外を見てみな。こんな所でじっとしていると余計まずいぜ。」

二人は車の外側をズラツと取り囲んでいる中沢組の戦闘員を見て怖じ気づいた。仕方なく軽くクラクションを鳴らして車を走らせた。

「ほう、どうしたい。珍しい客人じゃあねえか。まさか首でも取ってくれて差し出しに来た訳じゃああるめえ。」

座敷で中沢が出てくるのを待っていた大船碇禎治の前に床柱を背にして中沢がドツカと座った。

「まあ、考えたらそうかも知れませんが。と言っても斬り合いに来た訳じゃ有りませんから安心してください。もっぱら丸腰でたった一人で来るんだからそんな心配もいりませんやな。」

横に離れて座っていた若衆連中が、大船碇禎治の斬り合いと言う言葉に反応した動きを押さえるように見回して大船碇は言った。

「それで、今日はいったい何の話がしたいと言うんだ。」

中沢が若衆を睨んで、大船碇に言った。

「まあ、簡単な話では無いので、一杯やりながら話そうぜ。」

「判った。おいみんなこの部屋から出て行け。そして酒の用意をしろ。」

中沢が手で追い払うようにして若衆達に言った。

「よし、これで誰もいなくなった。話を聞かせて貰おうじゃないか。」

「そうさなあ。まあそう急ぎなさんな。酒でも入らなくちゃしらふじゃ言えねえ事なんだ。」

大船碇禎治がせかす中沢を押さえて言った。

「ふん、どんな話しかしらねえが、ご大層なこった。おい、酒はまだか。」

中沢がつぶやいた後、障子の外へ向けて大声を発した。

酒が来て久し振りに酌み交わしたあと、

「実はな、金がいるんだ。まっ、使い道は野暮だから聞かねえでください。

その金も纏まったもので欲しいんだ。」

大船碇禎治が言った。

「なんだと。おめえさん。借金の頼みに俺んところへ来たって話しか。」

中沢が少し腰を挙げて言った。

「まあまあ、そう言いなさんな。実はな、そろそろ俺も歳だし引退を考え
たんだ。でもよう、後を継ぐ人間に思いあたらねえんだ。そこでふと考えた
のがおめえさんだったのさ。今まで色々あったよなあ。昔からおめえさん

とは喧嘩ばかりしてたよなあ。それが辞めようかと思った時におめえの顔が出てくるなんざ。俺もやっぱり歳かなあ。しかも同じ時期に山脇会の傘下に入るしよう。いつまで経ってもこうやって酒を酌み交わす事など出来やしねえと思っていたんだ。そう思ったなら矢も楯もたまらなくなって来てな。こうやっておめえさんの顔を見に来たって寸法よ。」

大船碓禎治がしんみりとした口調で話した。

「と言うことは、おめえさんは自分のシマを俺に譲りたいと言うのか。」
中沢が外の若衆に聞こえないように声を落として言った。

「そうよ。話が判るじゃなえか。」

「幾ら欲しいんだ。」

「そうよなあ。10億も積んでくれれば文句はいわねえぜ。」

「10億。随分と安く見積もったもんじゃねえか。そんなんじゃ若衆連中に手切れも出来ないんじゃないか。」

中沢が言った。

「なに、構成員も含めて約2000。すべておめえさんにくれてやらあ。」

大船碓禎治は手に持った盃をグイと開けて中沢へと差し出した。

「よし、判った。15億をやろう。おめえさんの退職金だ。」

中沢が大船碓から盃を受け取って言った。

「これで戦争も終結だな。」

大船碇禎治が徳利を持って中沢の盃を満たした。

「そうよな。ところでこれからどうするんだ。」

中沢がグイと飲み干し、その盃を大船碇禎治に返しながら聞いた。

「ふふふ、まあそれは内緒だ。女でも連れて山脇会の目が届かないところへでも飛ぶさ。」

「なんだ、もう決めているのか。そうか。おめえはいいよな。俺なんざ、ガキがウジャウジャいるからそのシマ分けに苦勞しているところだ。そんなことはまあいい。ところで、金はいつ欲しいんだ。」

中沢が今までの心の中の鎧を外して言った。

「そうだな。今日明日と言う訳にもいかないだろうから。俺の方から振り込み先を連絡するぜ。まあ外国だな。送金先は。」

大船碇禎治が考えながら言った。

「外国送金なんて俺んところではやったことないぜ。」

「まあそれは、俺んとこのヤスをこっちへ送り込むからそれにやらせればいい。まずはそいつを俺との連絡役としよう。ここへ送り込む前に奴には言い含めておくから、最初にそいつから養ってやってくれ。奴は今、俺んとこで代貸だ。こっちでもその程度で金をくれてやってくれ。銀行や金関係では

何でもよく判っている奴だ。そうそう奴は大学まででているからな。」

酒場

金曜日の夕方、香山と小野原は、ダルビーの町へと出掛けた。当初、香山が小野原に酒場へ行って酒を飲んでいると必ず誰かが話し掛けてくるから、それを無料英語教師として考えれば英語力が見る間に付くと教えた。それが毎週の習慣となった小野原に今日は香山も参加した。週末の酒場は喧騒その

ものだった。カウンターの前もテーブルも総て色々な職種の人々で埋められていた。すこし隙間を見付けカウンターへと進んだ二人がそれぞれの好みのビールを頼んだ。そのビールを受け取り何となく乾杯と言いグラスを合わせた二人に横で飲んでいた一人の農夫が聞いた。

「あんたら日本人か？」

60歳をとおに過ぎて、そろそろ衰えが訪れる頃合いの男だった。

「そうだよ。」

香山が少し考えながら言った。実は香山は既に国籍を移しているのだから本質的にはオーストラリア人である。

「あなたは先週も見かけたが、こっちで何をしているんだ。」

酒に酔ったくさい息を小野原に吹きかけながらその男が聞いた。

「えっ、わたしはリタイヤでこちらへと来ている。」

小野原勉が急に話し掛けられたので少しぎこちない言葉で言った。

「リタイヤした都会者がこんな所で面白くも無いだろう。毎日何しているんだ。」

酒臭いからみ口調でしつこく聞くので小野原が

「何を言ってるんだ。こんな良い所は無いぞ。空は綺麗だし、空気はうま

い。土地は広くて、人は良い。」

と、褒め称えてやった。

「お前ら日本人は金持ちだから、町へ行った方が楽しいんじゃないか。」

何となく喧嘩調に言葉がなってきた。これはまずいと小野原は考え廻りを
見回すと、二人の会話に興味を持っているのか廻りの総ての人々が見ていた。

「でもな、町には恐竜がないからな。」

小野原が言葉を返した。

「なんだと、恐竜だ。わははは。こんな所で恐竜探しているだと。わはは
は。」

酔っぱらいのお爺さんも含めて廻りの人々が笑い出した。

「なんか見つけたのか。」

別の人間が聞いた。

「樹木の化石以外はまだ見つかっていない。でもこの香山さんなんかここで数年間掘り続けて居る人なんだぞ。」

と言って香山を振り返った。しかしそこには香山の姿は無かった。そんな時、

「おーい、おーい。ミスターおの．．」

と、呼ぶ声が聞こえた。見回すと5メートル程離れたところでジェイソン課長がビールのグラスを挙げて小野原を呼んでいた。小野原はここで話して

いたら殴り合いになるかも知れないと危惧を覚え、人混みをかき分けながらジェイソン課長の方へと進んだ。なんとそこには香山も来ていた。

「ははは、酔っぱらいにからまれていましたね。」

「何あんだ、香山さんも知っていたのですか。助けてくれると思っていたのに振り返ったら居ないから、先に逃げたかなと思いましたよ。」

小野原が口を尖らせて言った。

「ははは、いい英語の勉強でしょう。実は本当に逃げ出したのですよ。このジェイソン課長を見つけましたからね。」

ジェイソン課長は制服警官も含めて数人で飲みに来ていた。

「制服で飲みに来るなんて日本じゃ考えられませんよ。」

小声で小野原が香山に言った。

「何言ってるんです。みんなの服を見てご覧なさい。制服姿じゃ無いのは我々ぐらいですよ。まあ農家の親父なんかは農機具メーカーに貰ったシャツなんかですがね。どうですみんな胸にどこかの会社ネームが入っているでしょう。いわゆる新宿や新橋なんかの立ち飲み酒場に背広に会社のバッチを付けて飲み戯れている人間とどこも変わりませんよ。」

香山が小声で言った。

「そう言われてみたらそうですねえ。それにしても警察官の制服はまずい

ですよ。」

「でもね、通勤途中でもみんな制服ですから、家に帰る前に一杯やってい
ると言うのは何もやましい事はありませんからね。」

小野原には説明されても納得出来ない。

「この前はありがとう。御陰で昨日犯人を捕まえましたよ。」

ジェイソン課長が横から声をかけた。

「えっ、そうですか。それは早いですねえ。さすがジェイソン課長だ。お
めでとう。」

小野原がグラスを挙げて嬉しそうに言った。

「でもな、ところがだ。まる2日もの間、否認を続けているんだ。誤認逮捕だとままずいのでねえ。」

ジェイソン課長の顔に少し暗い影がさした。

「その犯人は、どういった人物なのですか。」

廻りはすべて警察官なので声のトーンを下げる必要も無い。

「日本人だよ。被害者の息子。」

ジェイソン課長が追加のビールを注文しながら背中越しに言った。

「やっぱり、わたしもそんな気がしていたのですよ。」

香山が小野原にささやいた。

「そうですね。わたしも単純にかんがえていましたよ。でもそんなに否認するとなればもう少し深く考えなければなりませんね。」

物思いに耽って小野原が言った。

「やっ、こんな所に居た。俺の話はまだ終わっていないなかったんだぞ。」

さっきの酔っぱらい農夫が横から声をかけて来た。小野原を探して人混みをかき分けて来たようすだ。

その農夫は手にしていたビールジョッキを傾け一口飲んで言葉をつないだ。

「もう1年も前の話だが、ムーニーハイウェイで日本人のレンタカーにぶ

つけられたんだ。」

酔っぱらったその人が言葉をそこで切った。小野原はそれで日本人を怨んでいたのかと推察した。

「それでな、わしの車は畑の横に停まっていたんじゃよ。そこへフラフラ走ってきたそのレンタカーが後ろから突き当たってきてな、」

「おい、爺さん。それは何時頃の話だ。」

ジェイソン課長が気の毒に思っ言葉を挟んでくれた。

「なにさ、朝の4時頃だよ。」

「おい、爺さん。そんな早い時間にあんたは何をしていたんだ。」

「おまえさん、警察見たいな聞き方をするねえ。」

言葉と同時にジェイソン課長は内ポケットから警察手帳を取り出して酔っぱらいの顔面に突きつけた。

「ははは、なーんだポリか。なら仕方がねえや。」

その農夫は心持ち沈んだように言った。

「それでどうしたんだ。」

ジェイソン課長が話の先をうながした。

「へえ、それが面白い奴で。車のよこでション便をしていたわしが、見に行ったら。頭を押さえながら出てきて、わしの手には100ドル札で10枚を

握らせるんだ。ビックリして何の金だと聞いたら修理代だと言うんじゃない。まあ古いピックアップで1000ドル出せば買えるような車の修理代に1000ドルもくれる日本人は金持ちだと思っただけじゃよ。その日に自分で修理したからただで出来たし、夜中の事だから、この近くに住んでいる日本人の家からどこか町の方へでも帰る人かなと思って、この人が住んでいると言うものだから聞いてみようと思ったんだ。」

農夫がゆっくりと話したので小野原にも総て聞き取れた。

「それで、あなたはその日本人を見つけてどうしようというのだ。」
ジェイソン課長がまだ尋問調に聞いた。

「へえ、そんなにたくさんのお金を貰う訳にはいかないの、半分でも返そうと思っていましたんです。」

農夫が答えた。

「おい、爺さん。そんな必要はない。全部もらっときな。」

ジェイソン課長がその農夫の肩を叩きながら言った。

「待てよ。その車をレンタカーと言ったな。それはどうして判ったのだ。」

爺さん。」

「へえ、ナンバープレートが黄色のニューサウスウェールズ州なので、車の横に赤い字で大きく、Harなんてかって書いてあったからです。」

「そうか、車の車種は判るかい。」

「白のランドクルーザーでした。わしの一番欲しいくるまですだ。」

その爺さんが目を丸く輝かして言った。

「ははは、なるほどな。それでその男は一人だけで乗っていたのか。」

「へえ、一人だけだったと思います。」

ジェイソン課長はうまくその爺さんを誘導して聞き出している。

「ところでだな。爺さん。その男の顔を覚えてるかい。」

横から小野原が聞いた。

「そうだな、まあ見りゃ判るかも知れないが、そうそう目が……」

「爺さん。目がどうしたんだ。」

爺さんのグラスが空になっているのを見て香山が注文して受け取ったグラスを渡してやった。

「おっ、すまんねえ。そうだ目だ。話しているときどうも変だったんだ。わしを見て話しているのに目は違う方を向いているんだ。今、考えたら右目と左目が違う方向を向いていたなあ。だから目だけが印象に強いんだ。格好は普通の背広だった。でもネクタイはしてなかった。身体はわしより少し背が高かったなあ。」

そこまで一気にしゃべってグラスのビールをゴクゴクと飲んだ。

「よし判った。爺さん、ちょっと付き合ってくれ。すぐ終わるから。終わったら、今日の酒代は警察でもってやるから。」

ジェイソン課長に背をつかれ、ビックリしたような顔でジェイソン課長を見上げた爺さんが困惑した顔を覗かせてそのまま連れて行かれた。

「まあ、この店の裏側が警察署だから、事のついでにその犯人と思われる人物の面通しに行ったんですよ。」

小野原が香山に言った。

「なあんだ、そうなんですか。わたしはてっきりあのお爺さんが悪さをして逮捕されたのかと思いましたよ。所でその面通しって何ですか。」

香山が聞いた。

「えっ、知らないんですか。」

「ええ、そんな言葉は日本語に無いでしょう。」

「それは知りませんが、証人が別の部屋からガラス越しに容疑者を見て、あれは犯人だとか、違うとか言うのを聞いた事ありませんか。」

小野原が呆れたような顔で言った。

「ああ、あれね。あれを面通しって言うのですか。」

「まあ、良いじゃないですか。すぐ終わるでしょうから、帰ってくるまで待ってましょう。楽しくなってきましたね。」

小野原勉は本当に捜査を楽しんでいるように見えた。

15分も経たない内に爺さんがバーへと帰ってきた。

「あれ、爺さん。ジェイソン課長は？」

小野原が聞いた。

「後から来るって言ってたよ。あの人結構偉い人なんだね。知らなかった。」

警察の内部へ入ったのは始めてだったらしく爺さんが、ため息混じりに言った。

「さあさあ、ご苦労さん。爺さんこれ飲んで。」

香山が新しいグラスに入ったビールを手渡した。

「おっ、すまんね。」

受け取ったビールを爺さんは一息で飲み干した。

「やっ、凄い。爺さん飲める口だね。銘柄は何が良いんだ。」

香山が聞いた。

「わしはいつもブイ・ビーのラガーだ。あれが一番うまい。」

「よし、」と言って香山がカウンターの中で忙しそうに働いているウエイ

トレス婆さんに注文した。

「やれやれ、どうしようも無い馬鹿だよ。俺は。」

ジェイソン課長が帰って来てため息混じりに言った。

「結局、奴は本星じゃなかったんですね。」

小野原勉が聞いた。

「まあな。でもあと4日は調べてみるつもりだ。」

ジェイソン課長は落胆した肩を更に落として小声で言った。

「ジェイソン課長。ちょっと考えている事が有るんです。釈放する時間と

日付を教えてくださいませんか。それからあとは我々が尾行してみますよ。」

小野原勉が少し考えてから小声でジェイソン課長に言った。

「ふーむ。犯人で無いと決まったら我々が行動する訳にはいきませんから

なあ。いいでしょう。決まったら香山さんの携帯電話に連絡を入れます。」

ジェイソン課長は少し考えながら言葉を返した。

しばらくの雑談の内、二人は自宅までの帰路についた。

「日本に比べて飲酒運転には気楽な国ですねえ。香山さんは何杯飲みました？」

小野原が聞いた。

「えっ、数えていないなあ。10杯分ぐらいは金を出しましたけど、お爺さんに奢ったりしましたからね。それでも5、6杯は飲んでいますかなあ。」

香山はハンドルを握った片手で数を数えながら言った。

「わたしはもう少し飲んだかな。でもあの店に来ていた人達も車で帰る人でしょう。あの前で飲酒運転の取締りをやったら一晩でノルマ達成でしょうな。」

小野原勉が言った。

「まっ、一番に小野原さんは逮捕でしょうな。ははは。それよりか警察官がそこで飲んでいるのですからまずはありっこないでしょうな。ところでさつき小野原さんがジェイソン課長に頼んでいたでしょう。あんな日にちを聞いてどうするんです。」

香山が聞いた。

「あああれね。ちよつとした考えがありましたね。今捕まっている人物を少し尾行してみようかなと考えているのです。まあ暇つぶしの遊びですよ。いっそのこと香山さんも同行しますか？」

小野原勉は軽く言葉を放った。

「なんと。小野原さんはやっぱり警察根性が抜けきってませんね。そんなことをしても何の役にもたちませんよ。経費もかかるし。まあ、わたしは止めときましよう。」

香山は気が進まないので断った。

「まあねえ。でもこれを解決してあげれば。もしダルビー界隈で飲酒で捕

まったりした時に少しはお目こぼしをしてくれるかも知れないじゃないですか。ははは。まあ遊び、あそび。」

小野原は楽しそうに笑いながら言った。

逃遁行

大船碇禎治はジュネーブ空港へと降りた。ヨーロッパへは2度来たことのある。しかしスイスへは始めての旅だ。息子の亀井靖之が大船碇禎治本人の

サインが無ければ口座の開設も出来ないし、入れた金も引き出せないと言うから仕方なく来ただけで、住むのはやはりオーストラリアのゴールドコーストにしたい。既に息子の名義で自分用にとゴールドコーストで、少し北の外れにはなるが、サンクチュアリーコープと言う名の大きな団地の一角でウォーターフロントの家を購入していると聞いている。そこは24時間警備体制が出来ており、2名の警備員が入り口で常時入場者をチェックしていると言う。いわば不要な人物は団地内には入れないシステムだ。大船碇禎治のような逃げている人間には最適な環境である。住宅のすぐ裏側には自分専用のクルーザーを係留出来るジェティーと呼ばれる桟橋もあり、必要なら30フィ

「ト程度のクルーザーも買っておくと靖之は言っていた。だから逃げてはい
るが必要以上に心を狭めて生活する必要は無い。金を使つての楽しい人生を
過ごせば良いのだ。よしクルーザーも買うか。」

「いらっしやい。元気そうだね親父。」

アライバルターミナルのゲートを出た所で亀井靖之が迎えた。

「まあ、オーストラリアへ行くよりか少し飛行機に乗る時間が長いと言っ
ただけだから心配する事は無い。それよりかファーストクラスのイスがよかつ
たぜ。寝るのに今までのイスだと少しは傾斜が出来るけれど、今日のは全く
ベッドのように平になるんだ。だからぐっすり眠る事ができた。」

スイスへ入ったと言う安心感からか大船碓禎治ははしゃぎ気味で言った。

スイス銀行の口座を大船碓禎治から電話で教えられたヤスは、早速その日の内にその口座へと15億円を送金した。受け取った資金を大船碓禎治は靖之と共に、ヨーロッパ各地の銀行に作った亀井靖之の口座へと分散させて送金した。5日間程の滞在でそれらの作業を終えた靖之はオーストラリアへ、大船碓禎治はイギリスへと旅立った。

「じゃ、ロンドンへ降り立ったら、俺が頼んである通訳が迎えに出ているから心配無い。そいつには親父の写真を渡してあるから、向こうから接触し

てくる事になっている。昨日も言ったとおりゴールドコーストでの再会を半年後と言うのは長すぎる。日本とオーストラリアの状況を俺が見て連絡をするから、それまではゆっくりとヨーロッパを楽しむこつたな。」

靖之が税関へと入る大船碇禎治に言った。

「おう、判った。お前も気をつけろよ。」

大船碇禎治は言葉も少なく飛行機へと消えた。その数時間後には靖之もシドニー行き英国航空機の中にいた。

「何とか段取りは出来上がった。あんな親父でも親父だからな。長くは無
い寿命でも、生きられる限りは生きていられるようにはしてやりたい。それ

が俺のために苦勞して金を残してくれた親父への孝行だ。金はベースだ。多ければ多いほどその基礎となる位置を高く出来る。そのベースが無い奴は地べたを這って生きる。ベースが高ければ、その位置から物事を考える事も出来るし、命令も出来る。上から見る事が出来るから仕事の範囲も広げる事が可能だ。そう言っつて俺の為に金を集めてくれた。この15億を加えると既に俺の手中には50億円もの資金が出来た訳だ。これだけの金があれば大船碇組を再構築する事も出来る。しかし俺はそんなことに金を使わない。世界を相手に仕事をしたい。……」

靖之は眠りに就いた。

実行

「靖之さん。親父が気づいたようすなんだ。」

夜中に征次の泣くような声の緊急電話でたたき起こされた亀井靖之だ。

「何だ。どうしたんだ。訳を話せ。そうゆっくりと。」

「うん、今朝、親父が銀行へ行くって言うんだ。俺と一緒に行って通訳しろって。金をまとめないで分散するつもりだったらしいんだ。でも俺としたら親父に銀行へ行かれたら最後だもんな。今日は客が来る予定が有るって断

って事務所へ行ったんだ。そうしたら事務所の中には誰もいないんだよ。夜まで待ったけど本当に誰も帰ってこなかった。どうしたんだと弁護士の人に電話をかけたら、引越した後だった。靖之さん。俺、どうしよう。親父の事も、事務所の事も何も出来ないよ。」

征次が電話の向こうで泣き声を交えて言った。

「よし判った。今どこに居るんだ。」

靖之の言葉に

「今？今はモーターウェイだよ。プリズベンから帰っている。」

と征次が答えた。

「よし、それならロビーナまで走れ。そこで駅前の俺の新しい事務所へ来い。知ってるな？」

「はい、確か4階でしたね。」

「そうだ。今から行くから30分後に会おう。こんな時間だから、電気の点いているのは俺の事務所だけだと思うからすぐ判るだろう。」

靖之が時計を見ながら征次に言った。

「どうしたんだ。事務所に人がいないってのは。」

ちょうど30分後に事務所の前で会った二人はエレベーターで4階にあり、靖之が自分のキーでドアを開けながら後ろの征次に聞いた。

「ええ、別に事務所に用事があったって行った訳では無いのですが、家にいる訳にもいかなかったので行ったのです。最初は昼飯にでも出掛けているのかなと思っていたのですが、ちょっと昼寝をして4時頃コーヒーでも頼もうと自分の部屋から内線電話で遥香を呼んだんだ。その時に誰も出ないからどうしたのかと事務所へ出てみたら電気も点いて無くて、誰もいないんです。6時まで待ってたんですが誰も帰って来ないので事務所を閉めてカジノへ行ったんです。勝てなかったのでもう一度事務所に帰って見たけどやっぱり誰もいない。忙しいときなんかはみんな居るんですが。どうしてだろうって考えて吉川君に電話をしてみたらメッセージサービスで、この電話は

使われていませんっていうアナウンスだけなんです。」

征次が応接セットの長椅子に座りながら言った。

「その吉川君って言うのは弁護士だね。他の弁護士の電話番号は知らないのか。」

靖之が聞いた。

「弁護士もみんな独身ですから、俺が買っているマンションと一緒に住んでいました。あっと、遥香だけは別に自分でアパートを借りていました。でも最近部屋が変わったって言ってたなあ。」

征次が答えた。

「ちえ、しょうがないなあ。それはお前に愛想を尽かして出ていったんだよ。携帯電話番号は判るんだろう。そっちへかけてみたのか。」

「いえ、携帯電話はプライベートもかかってくるからとみんな教えてくれません。」

「参ったなあ。お前はどうしようもねえ奴だなあ。まあお前の弁護士事務所は開店休業にするしかないな。ところで親父の方はどうなった。」

靖之はポケットからウインフィールドを出し1本引き抜いて、うまそうに火をつけて深く吸い込んだ煙を吐き出しながら言った。

「うん、今朝10時頃俺が起きたら親父が、今から銀行へ行くからついて

こいつって言ったんだ。何のために行くんだって聞いたたら。一箇所の銀行に大きな金を置いていたら目立つから、分散させるって言うんだ。これはやばいと思ったから俺は今日客が事務所に来るから行けないって断って飯も食わないで家を飛び出したんだ。もし一人で銀行へ行っていたら全部の金を俺が引き出して、俺の口座に入れている事も知られるし、カジノでの負けも判ってしまうし、陳に払った金額や、靖之さんに投資している事も全部わかってしまう。もうばれているかも知れないんだ。」

征次は言葉の最後の方では力を落として言った。

「そうか、お前は親父が居るから苦労しているんだな。まあ俺ン所も同じ

ようなもんだ。親父はいつかは先に死ぬ。いつその事、早めに死んでくれた方がよいなんて考える事もあるよな。お前もそう思った事は無いか？」

亀井靖之がしんみりと征次に言った。

「そりゃあ俺なんか毎日そう思っているよ。今日でも今、家に帰った時に親父が死んだなんて聞かされたら飛び上がって喜ぶだろうなあ。」

征次が言った。

「まあな。お前ならそうだろうよ。」

亀井靖之がしんみりと考え込んで言葉を吐いた。

毛髪

その後ジェイソン課長は小野原勉などと酒を飲んだ時に聞いたレンタカーに対して調査をしていた。

「課長。レンタカーが割れました。」

数日後、捜査課の一人の刑事が書類と共にデスクの前に来て言った。

「そうか、その車を調べてみたのか。」

「いえ、1年も前の事です。から何も出ないかと考えまして領置しての捜査

まではしておりません。」

その刑事はジェイソン課長の問いかけに答えた。

「どうしてそう言い切れるのだ。トランクの中だとか床の下とかに掃除もしない所もあるだろう。もしかしたら何かが出るかも知れないでは無いか。すぐに手続きをとって領置しろ。鑑識には1年前と言う事を徹底させて調べろ。」

事件が迷宮入りになりそうなのを感じだしたジェイソン課長は少しでも糸口を辿ろうと焦っていた。

その頃、香山と小野原の亀井靖之に対する執拗な追跡尾行が展開されていた。

「小野原さん、毎日毎日こんな事を続けて居ても何にも意味が無いんじゃないですか。」

ある日香山が小野原勉の家で夕食を揃って食べている時に言った。

「まあね。尾行なんてのは昔からの方法で、古いと言われるのですが、これが一番効果的なのですよ。でも今日尾行を始めたからすぐにその結果が得られるかと言えば、余程のタイミングで無ければ得られません。だから、忍耐力のいる仕事なんです。香山さんは始めての事だからそろそろつまらなく

なって来たのでしよう。今夜は僕だけで出掛けますから、香山さんはゆっくり休んでください。何かがあれば、携帯電話を鳴らしますから。」

その夜、出掛けた小野原も明け方にはつかれた身体をいたわるようにして、帰宅しベッドへと潜り込んだ。

「そろそろ、ダルビーへ帰ろうかと考えているのです。何か恐竜が呼んでいる気がするんです。」

香山が昼食時に小野原勉に言った。

「ははは、なるほど恐竜が呼んでいるんですか。さすが香山さんだ。じゃあわたしも今週で切り上げていつもの生活に戻るとしましょうかなあ。」

小野原勉も成果の無い遊びを続けるよりも、趣味の成果を見つける方に気持ちを向け替えた方がより楽しい生活になると思いき直して言った。

「済みませんねえ。小野原さんの興味をうち砕くような事を言っただけ。香山が恐縮して言った。」

「いえいえ、実際わたしの興味は捜査なんかより恐竜ですからね。じゃ、今夜は豪勢にどこかのホテルのレストランで夕食を摂りましょうかな。いかがです。」

小野原勉が言った。

「そうですね。ダルビーへ行ったらうまい物は食べませんか。たまに

は散財しようかな。ははは。そうだ、わたしは古くから住んで居たので
すが行った事のないサンクチュアリーコープのホテル。えーと、何と言う名
前だったか忘れましたが、シーフードのうまいレストランがあるそうなん
で
す。」

「そうですか、では今夜はシーフードをたらふく食って鋭気を養って、恐
竜探索に備えますかな。」

香山の提案に小野原勉が同意して言った。

その夜、5時になって二人はホテルでの食事のために正装して出掛けた。
「サンクチュアリーコープってところは結構遠いんですね。知りませんで

した。」

小野原勉が車の中で言った。

「そうなんです。昔、わたしが入国したときにはまだ無くて、数年後一部が完成したときにフランク・シナトラを呼んで野外コンサートを開いたところなんです。勿論、聞きに行きましたよ。凄い人数の人が熱狂したのを覚えています。その後日本の会社がい取って販売していましたが、バブルで会社はつぶれてしまったそうです。でもそれからでも新しい所有会社が開発を続け、今ではショッピングセンターやマリーナ、それにゴルフコースを2つも持つ大きな団地になっていますよ。毎年ポートフェスティバルがそこで開

催されていて、何度か見に言った事があります。」

小野原勉は香山の説明をうなずきながら聞いていたが、なかなか想像が
来ない。

「その団地は入り口にゲートが有って、更にその前のロータリーに大き
な警備員詰め所があるのです。何人かの警備員が24時間体制で見張って入
場者の監視をしていますから最高の警備条件の団地なんですよ。だから結構
有名人なんか家が持っているそうです。確か日本の映画俳優なんかも買っ
ていましたよ。」

香山の説明は続いていた。

「さあ、着きましたよ。この進入道路からが目的地です。」

香山が言ってハンドルを右に切った。真っ直ぐの道がゲートへと続いていった。ゲートを入ると言われた大きなロータリーが正面に有り、ショッピングセンターなどへ行く車は左へと進む。そのまま真っ直ぐ行く道と、右へと行く道は住宅地へと続いている。それらの道には鉄製のゲートがあり、住人以外の進入を拒んでいるように小野原には思われた。車は少し坂をのぼりホテルの駐車場へと入った。

世界に冠たる名前のホテルだったので、小野原勉は高層ホテルのイメージを描いていたのだが何とそこはトロピカルスタイルに纏められた平屋建て

のホテルだった。

「こんなタイプのホテルは初めてですよ。」

小野原勉が言った。

「わたしはグアムやフィジーなどで利用しますから違和感はありませんが、日本では土地が少ないから考えられませんよね。」

香山は慣れた感じで小野原を先導しながらホテル内部をレストランへと進んだ。指定された席は大きな窓に面したテーブルだった。バイキングスタイルのレストランだ。窓から外を見ると煌々と灯りが灯された10面以上もあるテニスコートが一望出来る。色とりどりのミニスカートがはじけて楽し

そくに踊っている。

「さて、まずは飲み物ですが、ちょっと豪華にワインを飲みますか。」

香山が聞いた。

「いいですねえ。香山さん所へ行くようになってからワインの味を覚えさせて貰いましたからねえ。」

香山はテーブルの横で黒色スーツに身を包み左手に真っ白なナプキンを垂らして待っているウェ이터にワインリストから白ワインを選び注文した。

「来週からの恐竜発見に期待して乾杯。」

二人はワイングラスを持ち上げてにこやかに乾杯した。

「さあ、料理を取りに行きましょう。食べ放題ですから料金分は食べないとね。」

香山が言って立ち上がったので小野原勉も続いた。

小野原が大きなエビをナイフで切り裂いているとき、香山がテーブルを指先で小さく叩いて信号を送って来るのに気がついた。指先で香山が後ろの席を指している。小野原がそろっと顔を廻して見た。そこには今朝まで尾行をしていた亀井靖之が誰かと食事をしていた。

「参ったなあ。忘れようとしている時に会うなんて。」

小さな声で小野原勉が香山に言った。

「まあ先方さんは我々の事を全く知らないのですから、しらん振りでご食べましようよ。これうまいですよ。」

香山が言った。

「そうですね。」

小野原勉は言ってナイフとフォークを動かし始めた。しかし、何かが気になる。ふと立ち上がって

「香山さんトイレはどちらですか」と聞いた。

「えっ、ああこの向こうですよ」

小野原は指さされた方へと歩き、背中を向けて食事をしている人物をちらっと横目で見てトイレへと向かった。

「香山さん。そろそろ行きましょうか。」

トイレから帰った小野原勉が席にも座らずに香山に言った。

「えっ、まだそんなに食べてませんよ。そうですか。」

香山が未練そうに皿を眺めて立ち上がった。

「どうしたんです。まだ払った金額分は食べてませんよ。」

駐車場で車のドアを開けながら香山が不満そうに小野原に言った。

「香山さん。ビックリしましたよ。幽霊を見たんです。」

小野原勉が小さな目を大きく見開いて言った。

「何ですって。幽霊。何を馬鹿な事を言ってるんです。どこで見たんです。」

香山が不審そうに言った。

車に乗っても考えを巡らせている小野原勉だった。

「おい靖之。お前が選んだこの団地は最高だぜ。こんなに足を伸ばせる所は俺には初めてだ。毎日毎日何かがおこらねえかとビクビクおろおろする世

界から離れて、こんなのにのんびり出来る事は俺にはもうねえものだと思っ
いたぜ。」

大船碇禎治が亀井靖之に向かって言った。

「まあ親父さんも苦勞したからなあ。これからはゆっくりと魚釣りでもし
て楽しむこった。明日クルーザーでも買いに行こうか。」

と靖之が言った。

「いいねえ。だが誰が運転するんだクルーザーなんて。」

「そんなの簡単だよ。免許を取りなよ。」

「馬鹿言うんじゃないねえ。英語だろう。俺が出来る善ねえ事を知っているく

せに。」

大船碓禎治が言った。

「俺が取れるようにしてやるよ。日本語ならいいだろう。まっ、試験の時も横にいてやるから。」

「そうか、そんなことが出来るのか。やってみるか。それもいいが面白い物に行くにも不便があるから通訳の女でも探しておいてくれるか。」

大船碓禎治が好色そうな顔をして言った。

「判っているよ、親父がヨーロッパを楽しんでなかなか、こっちへ来無かったから探していなかったんだ。まあ2、3日したら連れてくるよ。」

靖之が言った。

「お前、少し前に警察に引っ張られたんだってなあ。」

大船碇禎治が声をひそめて言った。

「えっ、誰に聞いたんだ。誰も知らない筈なんだが。」

靖之が焦って言った。

「まあそんなことは誰でもいいや。結局はどうなったんだ話を聞かせろ。」

「ああ、仕事には関係無い事なんだ。俺が以前に家を世話したり、大学を世話してやった馬鹿息子の相談に乗ってやってただけなんだ。だが、それも問題が無かったんで警察はすぐ返してはくれたから親父には何も言わなかつ

たんだ。気にするなつて。」

靖之が最初の狼狽から立ち直って言った。

「まあそれならいいけれど、ところでなんだあの日本人は、恐竜とかなんとか話していたなあ。」

大船碇禎治が話を変えた。

「変なやつらだなあ。こんな所へ恐竜を探しに来ているなんて。暇な日本人が居るもんだ。まあ俺達には縁の無い人種だぜ。」

靖之も言葉を返した。

「そうだな。恐竜では儲けにもならないだろうし。まあ典型的な小金持ち

の日本人だろう。それにしても飯も食わないで出ていったぜ。」

「親父さん。気にする事なんか無いぜ。忘れろって。それよりか明日は昼過ぎに来るからな。クルーザーだよ。」

「おっ、そうだ。大きいのか？」

「俺も乗りたいから、スポーツタイプのでっかいのがいいなあ。」

「よしよし、まあお前に任せるぜ。」

「なに。出たか。」

ジェイソン課長がイスから飛び上がった。

「はい、後部シートの後ろ、予備タイヤ収納ケースの付け根に一本だけ掃除に漏れた毛髪が被害者の毛髪と一致しました。」

担当刑事が息を切らせてジェイソン課長の部屋へと飛び込んで来て言った。

「よし、そのレンタカーを借りだした人間を徹底的に調べろ。ただし、本人には気づかれないようにな。」

ジェイソン課長の声と共にその刑事はまたもや風のように走り去った。

「ふふふ、見てろよ。今度は逃がさないぞ。」

ジェイソン課長がつぶやいた。

「何故だ。何故なんだ。どうして死んだ筈の人間があそこに居るのだ。あの白骨死体は別人のものか。」

あれから2日間、小野原勉は考え続けた。

翌日、香山の提案でダルビーへと帰り、本来の目的へと行動を移す話になり、小野原勉はもやもやする心を抑えて香山の車へと同乗したものだ。た。

「そうだ忘れていた。顔だ。」

助手席で小野原勉が叫んだ。

「どっ、どうしたんです。」

香山がビックリしてくわえていたタバコを取り落としそうになって慌てて言った。

「あっ、済みません。思い出したのです。ずーと考えていた事がやっと霧が晴れました。」

小野原勉が言った。

「なんなのですか。ビックリするじゃないですか。何をおもいだしたのです。」

正常に戻った気持ちで車のハンドルを持ち直し、香山が聞いた。

「顔、顔ですよ。白骨死体の顔がつぶされていたでしょう。あれを思い出したのでですよ。」

小野原がせき込んで言った。

「あれは当初、身許を隠すためにやった事だと考えたのですが、身許が割れた時点でみんなが忘れていたのですよ。そろそろダルビーに着くでしょう。ちよっと警察に立ち寄ってくれませんか。」

「ええ、良いですよ。でも指も無かったし、ワイシャツの洗濯ネームからも殺された人物は特定出来たのでしょうか。」

香山が聞いた。

「そうですね。でも生きていたんです。殺された筈の人間が。だからあれは身代わりの人間の死体だったんです。」

小野原勉が説明したところで、車はダルビー警察署の前に着いた。

「へー、そうだったんですか。言ってくれないから小野原さんが病気にでもなったかなと心配しましたよ。」

香山が言いながら警察署のドアを押しかけたところで中から飛び出してきた刑事と鉢合わせをした。

「ソリー」と言葉を残してその刑事はパトカーに飛び乗って走り去った。

「痛いなあ、なんだあいつ。」

香山が頭を押さえながら立ち上がってつぶやいた。

「ジェイソン課長に会いたいのですが。」

振り返ると既に小野原勉が受付で話をしていた。

二人がジェイソン課長の部屋へと通された時に、ジェイソン課長がつぶやいているのを耳にした。

「おう、小野原さんに香山さん。何か良いことでも有りましたかな。」

ジェイソン課長がさしのべた手を握って、小野原勉が言った。

「何か良い事があった様子ですね。」

逆に小野原勉が聞いた。

「そうなんだ。今さっき鑑識からの連絡で死体の毛髪と、レンタカーの中から発見された毛髪が一致したんだ。」

ジェイソン課長が言った。

「えっ、そうなんですか。それは良かった。良かった。」

小野原勉がジェイソン課長の手を握り踊るように感激して言った。

「どうしたんです。小野原さん」

ジェイソン課長がいぶかるように聞いた。

「我々も発見しましたよ。被害者はあの人物じゃ有りません。」

小野原勉が言った。

「えっ、ど、どういう事ですか。」

今度はジェイソン課長の驚く番だった。

「実は数日前にこの香山さんと、あるレストランで食事をしたのです。その横の席に今まで死んだ人物だと考えていた人物が食事をしていました。我々が犯人だと考えて追求したあの亀井靖之と共にね。」

小野原勉が説明した。

「えっ、どうも貴方が言っている事がわかりませんね。殺された大船碇禎治が生きていると言う事ですか。」

ジェイソン課長が聞いた。

「そうですよ。その人物が生きて堂々とレストランで食事をしていましたよ。」

「なんと、、そうすれば我々は何を追いかけていたのでしょうか。」

ジェイソン課長がガツクリとイスに腰を落とした。

「まあ、そうガツクリしないで下さい。心配ありません。そのレンタカ―の借り主を捕まえてください。それでこの事件は解決ですよ。まずは大船碇禎治が本当に生きているのかを調べてください。」

小野原勉に言われてしばらく、机を見つめていたジェイソン課長がはたと

立ち上がってドアを開け、

「おい、イミグレ事務所に電話を入れろ。大船碇禎治が入国しているか調べろ。」

と捜査員室に残っていた刑事に命じた。

「小野原さん、確かにそれは大船碇禎治でしたか。」

「ええ、確かです。」

横から香山が言った。

「そうですか、あなた、香山さんも確認しているのですか。」

ジェイソン課長がこんどはゆっくりとイスに腰を降ろした。

「課長。5日前にイギリスから入国していました。観光ビザです。」

先の刑事がドアを開けて叫んだ。

「やっぱり。」

ジェイソン課長は次の命令を待っているその刑事を追い払うように手を振って追い出し

「小野原さん、貴方はどうお考えですか。」

と聞いた。

「何を落ち込んでいるのです。事件は解決しましたよ。そのレンタカーを借りた人間ですよ。まあ重要容疑者として引っ張ってきて吐かせれば簡単に

判りますよ。そうそう、この香山さんは治安判事ですから必要なら逮捕令状の発給のサインをしてくれませうよ。」

小野原勉は言って香山にウィンクをした。

数日後、香山の山荘の広いテラスで寝椅子に身体をまかせて香山と小野原がビールを飲んでいたところにジェイソン課長がパトカーを運転して来て言った。

「その節はお世話になりました。御陰で100パーセント解決しました。」

「それはおめでとうございます。いかがですか、ちょっとビールでも飲みませんか。」

小野原勉がジェイソン課長と握手を交わしながら言った。

「おっ、いいアイデアですな。ここに座ってもよろしいかな。」

「どうぞどうぞ。」

香山がイスの上をかたづけ、ジェイソン課長を招いた。

「いやあ、助かりましたよ。実際、小野原さんから聞かされなかったら、未だに死体と犯人とが結びつかなくて迷宮入りするところでした。」

香山がビールを手渡したところで、ジェイソン課長の回想録が始まった。

「実はあれからすぐゴールドコースト市警へと連絡して容疑者を拘束したのです。そこへわたしが出向き取り調べをしたのですが、捕まったことが嬉しかったようにしゃべりだしたのですよ。こっちがビックリした程でした。何の容疑で拘束されているかも話さない内からあれは自分の親父だと言うんですからねえ。反対に真犯人がいてそれをかばっているのかと考えた程でしたよ。」

「へえ、よっぼど、心の底で罪の意識があったのでしょうかね。」
香山が言葉をはさんだ。

「そうですね。そうとしか考えられない事ですよ。」

ジェイソン課長もうなずいて回想録を続けた。

「担当刑事が彼の周辺事情を聞き込みましたら、かなり前から事務所も営業をしております。それにも関わらず金回りが凄いです。我々から見ても考えられないような金額をカジノで遊んでいたのですからなあ。母親の経営するレストランは大して大もうけをしている風にも見えないので、銀行関係調べてみると30歳程の男が手に出来るような金額では無い30億円もの預金を持っていたりで、追求したら親父の金を取り込んでいたんですね。まっ、これが発覚しないようにと殺してしまった訳です。」

「なるほどねえ。うっかりと大金持ちにもなれませんか。そう考えればわたしなんか命拾いをしたようなものですね。ははは。」

香山が小野原に向かって言った。

「所でジェイソン課長。あの死体が身につけていた衣服はどうなったのですか。」

小野原勉がジェイソン課長に向かって聞いた。

「あああれね。あれに関してもしゃべりましたよ。やはり我々が目を付けていた亀井靖之が提供したものでした。実際殺しのシナリオを考えたのも亀井靖之でした。熊谷征次はそれを忠実に実行しただけで、しかもその実行途

中で交通事故を起こし、1000ドルを相手に掴ませた段階でそれに関しては終わっていたと考えた事が、命取りになったわけで馬鹿な奴ですよ。」

「それじゃ、小指の先が無かったでしょう。あれはどうなんです。」

「あれに関しては、やはり実行は征次でしたが、亀井から貰った携帯用の葉巻の先切りギロチンが有るでしょうそれで一気に切り落としたようです。

勿論、証拠物件として確保はしております。」

小野原勉の問いにジェイソン課長が答えた。

「葉巻の先切りギロチンってのはどんな物なのですか?」

香山が聞いた。

「楕円形の先に斜めに歯がついたものを二枚重ね合わせて歯の反対側に指が入る程の穴があいており、人差し指と親指で挟み込んで真ん中の歯を噛み合わせて葉巻の先を切ると言うプラスチックで出来た道具ですよ。普段は手に入る程度のケースに収まっています。」

ジェイソン課長が手のひらに絵を描いて教えてくれた。

「へえそんな物で指が切断できるのですか。」

「ええ実験はしていませんが、本人が言うには体重を乗せて押し切ったそうです。いわゆる大船碇禎治に見せかける為だったようです。頭を殴って殺した後、指を切断してその後、背広やワイシャツを着替えさせたようですね。」

殺害の第一現場は征次の弁護士事務所だったようです。小野原さんが言ったように野球のバットで横殴りにしたようです。そこで、土地の売買で土地勘があった亀井が道案内をしてダルビーの河川底に遺棄したものです。勿論亀井も殺人示唆と死体遺棄幫助罪で逮捕しました。」

ジェイソン課長が帰ったのち、

「ところで、どの時点で小野原さんは征次が殺した事に気がついたのですか。」

香山が聞いた。

「まず、最初に弁護士に会った時点です。わたしの前職を知った段階で急

に態度を変えた。これは何か我々に知られては困ると言う事をしているなと感が働いた。でも実際はしようとしていた時期だったのですが。それに親父が行方不明になっているのを知っていながら届け出もしなかった。親父名義の預金を総て自分名義に書き換えていた。まあそんなことを繋いで行けば、わたしで無くても誰でも判りますよ。そうそう、ついこの前ブラキオサウルスを発見した時、石につまづきましたよね。あれと同じ事でしたよ。こんどはレストランと言う発掘場所で大船碇禎治と言う石につまづいたのですよ。それがきっかけで犯人を発見できた訳ですからね。」

小野原勉が答え、ふと考えて、

「香山さん、少し前までは女房はいらないけれど子供は欲しいなんて考えた事もありましたが、今回の事件を振り返ってみたら、やはり一人暮らしはいいものですねえ。」

小野原勉が言ってビールをグイと飲み干した。

プロローグ

大船碇禎治は困惑していた。多くの金は銀行に有るのだが総て息子の靖之

の名義になっている。銀行へは行ったこともない。しかもビザの期限が近づいている。靖之逮捕のニュースで通訳の女が適当に置いてあった500万円程を持ち去って来なくなった。通訳の女と言っても靖之が探してきた程だから肉感的で良い女だった。40を越えた歳だったが、テニスで鍛えたその身体は見目には20歳代にしか見えない。ベッドでのテクニクは狂おしい程だった。惜しい女だったが仕方がない。持ち逃げされた金も手切れ金をやっただと思えば腹もたたない。しかし手持ちの現金は金庫に残していた1000万円程しかない。やむなく大船碇禎治は日本へと帰る事にした。日本へ帰ればそれこそ逃避するだけの人生が待ちかまえている筈だ。言葉さえ通じるな

ら何とかなるだろう。

「おい、大船碓の。長い旅行だったな。」

成田で出向かえたのは中沢会の会長、中沢だった。

帰国前に電話でヤス呼び出し、日本での住みかなど色々頼んだのが裏目に出たのを大船碓禎治は悟った。今のヤスは俺の身内では無く、中沢の身内となっていたのだ。それを今頃になって気づくとは、大船碓禎治はくちびるを噛んだ。

★作者からのお願い★

この小説に出てくる人物、会社名、その他現存社会に類似する名称が有りましても総て、架空のものです。ご了承下さい。

素読していただいた方から、エムパック社3人の取締役がヨーロッパへ逃げたきりになっている。悪をのさばらせるのはいけないと指摘されました。ごもっともです。作者もそう思います。そこで作者は考えました。今回の小説はオーストラリアが舞台でしたが、次作はイギリス版で書きます。その段階で彼等3人を登場させますので、次作「英国版恐竜探索殺人事件」を楽しみにお待ちしております。

恐竜探索殺人事件